日本紀標註

巻之八

和書門
類 四三七一八 號
函 一四三
架 一
冊 二六

内閣文庫
和書
類 四三七一八 號
冊 二六
函 一三七
架 九
(八冊)

内閣文庫
番號 和 43718
冊數 26 (8)
函號 137 99

国立公文書館
National Archives of Japan

第一四五號

国立公文書館
National Archives of Japan

○原本巻首ニ日本書紀巻第七トアリ

日本紀標注巻之八

敷田年治謹注

景行天皇

大足彦忍代別天皇

○原本忍代別の代字を脱せり、例を以て補ふ○大足彦忍代別天皇、記に大帯日子淤斯呂和氣命ニ作きり、彦以上ハ称名ニて忍代ハ記傳に押知と云へり、此天皇を後ニ景行と

大足彦、忍代別天皇、活目入彦五十狹茅天皇、第三子也、母皇后曰日葉洲媛、命、丹波道主王之女也、活目入彦五十狹茅天皇、三十七年、立爲皇太子、時年廿一、九十九年、春

謚奉まつり○日葉洲媛命、洲を上に酢と作まり○己卯十一日○丙寅、原本丙戌と作まり、類聚國史と據りて改む○戊辰

二月、活目入彦、五十狹茅、天皇崩、元年、秋七月、己巳朔己卯、太子即天皇位、因以改元是年也、大歳辛未

三日○稲日大郎姫の、稲日ハ播磨国の郡名ふて、和名抄と印南、伊奈美と注せり、播磨風土記と、此古汝弟、娶吉備比賣、生兒印南別嬢、此女端正秀當時、尓時大帯日古天皇欲娶此女云々、記と吉備臣等之祖、若建吉備津日子、女、伊那毘能大郎女とあり○郎姫を、イラツメと訓る、イラも入も色も親む詞ふて、母兄弟妹准て、字書に郎、男子之称と注し、晋書列女傳と、僕稱主曰郎ともあまバ、男女と渉て云、又、原本訓注と咩を咩咩と作る其一ハ衍まつバ削りつ○大雄皇子、名義次と見る○稚倭根子皇子、稚ハ美称、根ハ親む詞○雙生、上代雙生の前後ハ、何を以て分々む、按と上代も必前生を兄と定々む支那国の古も、論ありて定まらむ、後世ハ後産を兄とす○日本童男の日本ハ後と称たるや、童男名義考、ず○日本武尊、名義下と見や○一丈の丈ハ、杖にて十尺を云、故仲哀紀と、十尺

稲日大郎姫、姫此云異羅菟咩、郎

爲皇后、后生二男、第一曰大雄皇子、第二曰小雄尊、一書云、皇后生三男、其第三曰大雄皇子、小雄尊、一日

同胞而雙生

天皇異之、則誥於雄、故因號其二王、曰大雄小雄也、是、小雄、尊、亦、名日本童男、童男、此云亦曰日本武尊、名義奈尊、幼有雄略之氣、及壯容貌魁偉、身長一丈、力能扛鼎焉

ともめり、案ずるに上代の狀ハ甚長うりゝむ○扛鼎、和名抄ニ、鼎三足兩耳、和名阿之賀奈倍、釜、同書ニ賀奈閉、一云末路賀奈倍とあり、扱器物ニ某閉と云フなり、鍋雖齊貪などの如し、鼎ハ金ハ以て鑄造ものゝ名なり、支那国にて、昔禹ハ九牧の金を收て、荆山の下に鑄しなどゝあるとぐゝ云ふ、其を舉ル人ハ甚稀なるべしに傳へ、史記項羽紀ニ、力能扛鼎、文選呉都賦ニ、翹關扛鼎などニ、倣ふ文なり

○車駕、儀制令ニ、乘輿、服御所稱、車駕、行幸所稱○屋主忍男武雄心命

三年、春二月、庚寅朔、卜幸于紀伊國、將祭祀群神祇、而不吉、乃車駕止之、遣屋主忍男武雄心命、一云、猪心、令祭、爰屋主忍男武雄心命、詣命を念ニ誤ル也○阿倫柏原、詳なるべし、或云熊野本宮の地之居于阿倫柏原而、祭祀神祇、仍住九年、則娶紀直遠祖、菟道彦之女影媛、生武内宿祢

紀直、姓氏録ニ、神魂命五世孫、道根命之後也、續紀廿六ニ、紀伊国名草郡大領、正七位上、紀直国栖と云人見也○菟道彦、記傳に紀伊国若山の邊ニ、宇治てゝ地名なりと云、記ニ木国造之祖、宇豆比古之妹、山下影日賣とあり、如此記せるも忍ち、武内宿祢の世に名高くもバなり○武内宿祢の、武ハ称、名内ハ地名ニ也と云、能土人ニ問べし○

○甲子十一日

○美濃ハ、国造本紀ニ、三野ニ作る、和名抄ニ、同國本巢郡に、美濃郷あり、此地より廣まりたる國名ニ

四年、春二月、甲寅朔甲子、天皇幸美濃、左右奏言之、茲國有佳人、曰弟媛、容姿端正、八坂入彦皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕、則隱竹林於是

○弟媛ハ、姉ニ對、ゝる称○容

姿をカホとよめる、紀中、顔色顔貌顔容面貌をもとめ、形容、姿色、相貌、形姿、容止、貌容、等惣て同訓なり、上代も面より形ふるまひを、カホと云ーをや○八坂入彦皇子ハ、崇神天皇の御子なり○泳宮万葉十三ノ、八十一隣之宮と書なり、略解ノ同国土岐郡ノ、久々利と云處あり、と云る、白河殿七百首ノ、たのめたゞ〳〵るの宮の池ノまを、おひおきつひのもるべとハなれ、爰の古事をよめり○夫婦、神代紀ノ遘合為夫婦とあり、夫與婦ともる○不便、允恭紀ノ、容止不便、欽明紀ノ、寢

天皇、權令弟媛至而、居于泳宮、泳宮、此云區玖鯉魚浮池、朝夕臨視而戲遊、時弟媛欲見其鯉魚、遊而、密來臨池、天皇則留而通之爰弟媛、以爲夫婦之道、古今、達則也、然於吾而不便則請天皇曰、妾性不欲交接之道、今不勝皇命之

疾不豫、是ハ古言ゐめまど、此紀をおまて、のうる語を見ず、意を字義ノつきてもるべー○不欲交接之道、清寧紀ノ、飯豐皇女於角刺宮與夫初交謂人曰、一知女道、又安可異、終不願交於男○穢陋新撰字鏡ノ、覩醜也加太奈志、又醜醜加太奈志ゐど見て意をうべー○久之の二字古本ノあ〜○八坂入媛ハ、父の名を襲ぎ〳〵り○貞潔、千載集ノ、いさぎよよ池ノ影ゐ抜うゝびぬま、ゐづゝやせむと、思ふ我身を、和訓栞ノ、勝清と云、り○五百城入彦皇子の、五百城ハ城の多ゐる意の称、なり○忍之

威、暫納帷幕之中、然意所不快、亦形姿穢陋、久之不堪陪於掖庭、唯有妾姉、名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔、宜納後宮、天皇聽之仍喚八坂入媛爲妃、生七男六女、第一曰稚足彦天皇、第二曰五百城入彦皇子、第三曰忍之別皇子、

別皇子字の如し、但之を行きゝバよむべからず、記ゝ押別命となり○稚倭根子皇子の如し、記ゝ倭根子命ゝ作きり、此皇子上ゝハ、稲日大郎姫の御腹の、一書ゝ出せり○大酢別皇子、名義詳ならず○渟

第四曰稚倭根子皇子、第五曰大酢別皇子、第六曰渟尉斗皇女、第七曰渟名城皇女、第八曰五百城入姫皇女、第九曰麑依姫皇女、第十曰五十狹城彦皇子、第十一曰吉備兄彦皇子、第十二曰高城入姫皇女、第十三曰弟姫皇女

尉斗皇女、記ゝ沼代郎女ゝ作きり、名義考へず、和名抄ゝ熨斗、所以熨衣裳也、和名乃之とあり、尉ハ熨の本字也○渟名城皇女、記ゝ沼名木郎女ゝ作きり、崇神天皇の御子ゝ、渟名城入姫命ありて、彼處ゝ注せり○麑依姫皇女、記ゝ香余理比賣命ゝ作きり、名義ハ考へず○五十狹城彦皇子、名義を考へも、舊事紀ゝ彦上ゝ入字あり、同書ゝ五狹城入彦命、三河長谷部直、祖と記せり、和名抄ゝ参河國碧海郡郷名谷部、續紀二十九ゝ、参河国碧海郡人、長谷部文選と云、人見也記ゝ此御子なり○吉備兄彦皇子、記に吉備之兄日子王ゝ作きり、吉備国ゝ由ありゝむ○高城入姫皇女、山城志ゝ綴喜郡ゝ高木村あり、此地ゝ由ある御名ゆゑ○弟姫皇女、字の如し○三尾

又妃三尾氏、磐城別之妹、水齒郎

氏、原本三字を脱せり、集解ゝ熟田本及舊事紀ゝ據て補る

媛生五百野皇女、次妃五十河媛、生神櫛皇子、稲背入彦皇子、其兄ゝ從ふ、垂仁紀に磐衝別命、是三尾君之始祖也国造本紀ゝ、羽咋国造、泊瀬朝倉朝御世三尾君祖石撞別命兄、石城別王

弟稲背入彦皇子、是播磨別之始祖也、次妃、阿倍氏、木事之女、高田媛生武國凝別皇子、是伊豫國御

宋賜国造○水
齒郎媛ハ、反正
天皇を瑞齒別
尊と申すおホ

村別之始祖也、次妃日向髮長大田根、生日向襲津彦皇子、是阿牟ト○五百野皇女、地名なるべ君之始祖也

し、記ニ見ヱず○五十河媛、是も地名ニよりて、記ニハ神櫛王の御母ニ、伊那毘之大郎女とあり○神櫛皇子の神ハ、尊称櫛ハ奇なり是ハ略称を傳たるか中臣宮處氏本系帳ニ神櫛帶比古王命ニ作り○稲背入彦皇子山城志ニ、紀伊郡ニ稲瀬てふ地名見ゆ○讃岐国造、国造本紀ニ、輕嶋豊明朝、御世景行帝、皇神櫛王三世孫、須賣保禮命、宋賜国造○播磨別、姓氏録佐伯直、條ニ、景行天皇、皇子、稲背入彦命之後也、男御諸別命、稚足彦天皇、御代、中ニ分針間国、給之、仍号針間別云々、別てふことを次ネ見ゆ○阿倍氏、上ネ注しつ○高田媛、和名抄山城国、葛野郡高田郷、式ネ河内国澁川郡、鴨高田神社見ゆ、是らの地ネ由なる名ネや○武国凝別皇子、惣て称たる名ある、凝も許呂の轉ネて、叱る古言なるを、威なる意ある○御村別、伊豫国の地名ある、べし、別も同国の郡名ネ存る○髮長大田根、按ニ髮長も日向国の地名ニや應神紀ニも髮長媛見ゆ、和名抄同国諸縣郡ニ、大田郷ある、根ハ親む詞○襲津彦の襲ハ、大隅国の郡名噌唹ネて、神代

紀ニ注せり○阿牟君、地名なるべし、長門国郡名ニ阿武あり、此氏人、日本後紀二十一ニ、阿牟公人足、文徳實録ハニ阿牟公門継と、あり外ハ史ニ見ゆず

○襲武媛、是も日向の人ネや、

次妃、襲武媛、生國乳別、皇子、與國なるべ郡名ニて、武も字の如し○国乳別皇子の、国も字の如く、乳ハ舅なるべし

背別、皇子、一云、宮道豐戸別、皇子、

○国背別皇子の背ハ、兄なるべし○宮道別皇子ハ、地名ニよりて、和名抄参河国寶飫郡郷名ニ宮道あり○豊戸道戸

其兄、國乳別、皇子、是水沼別之始祖也、弟豊戸別、皇子、是火國別之始祖也、夫天皇、之男女、前後并八十子、然除日本武尊、稚足彦、天皇、五百城入彦、皇子、之外七十餘子、皆封國郡、各如其國、故當今時、謂

別皇子の、豊ハ宇の如く戸ハ富なるべし○水沼別、是ハ筑後国郡名ふて、神代紀ニ水沼君とあり、彼處ニ注せり○火国ハ、肥前肥後を云、○七十餘子、記ニ七十七王ニ作り、舊事紀ニ、八十一皇子之中、男、五十五女、二十六とあり○封国郡記ニ別ニ賜国国之國造、亦和氣及稲置縣主とあり、封ハ大祝、詞ニ事依奉岐とあり、事を寄授ふを云、○諸国之別ハ、別封と云、よよまるゝ、又我兄の切別まれて、親しく称るゝ猶考ふべし

○神骨、記ニ日子坐王、子、神大根王、亦名ハ爪入日子、王ハ、三野國之本巣国造、長幡部連之祖とあり、おほ人なり○遠子和名抄、美濃国本巣郡、郷名遠市と云、地名ニ、依まる名なり

諸國之別者、卽其別王之苗裔焉

是月天皇、聞ニ美濃、國造、名ハ神骨之女、兄名兄遠子、弟名弟遠子並有國色、則遣ニ大碓ノ命ヲ、使レ察ニ其婦女之容姿、時ニ大碓命、便密通而、不復命、由レ是ニ恨ニ大碓命ヲ、冬十一月庚辰朔、乘輿自ニ美濃ニ還、則更都ニ於纒向ニ、是

○遠大碓命、是ハ行幸、先より、謂ニ日代宮ト

遣レ給ひしをや○密通ハ、通婬又親娶、又婚ふどをよめり、仮名ハ新撰字鏡ニ、新、大波久と注せり○纒向ハ、大和国城上郡の地名なり○日代宮ハ聖宮の轉ふて中臣宮處氏本系帳ニ、日知宮ニ作り、比自里能美夜の注あり、ふべきバ日代宮とよむべし、宮趾ハ大和志ニ、在ニ城上郡穴師村ノ北

○熊襲ハ、大隅国噌唹郡ニて、熊襲ハ彼土人の勢、熊の如きを云、冠らせて、呼なり○つ

十二年、秋七月、熊襲反之不朝貢、八月乙未朔己酉、幸ニ筑紫、九月甲己酉十五日○幸筑紫ハ、筑紫ニ出坐むと、京を立給ふを云、

子朔戊辰、到ニ周芳婆磨、時ニ天皇南望之詔ニ群卿ニ曰、於南方ニ烟氣多起、必賊將在、則留之、先遣ニ多臣ノ祖武

○周芳、和名抄ニ周防、須波宇と注し、今も然云り、案ニ防、宇を上代、ハウとよまし例ふられバ、是ハ周芳ゝむと、年久しく思ひ渡るを、明治二年五月朔、彼国人近藤芳樹ゲ、己ゲ難波の寓ニ訪来て語りゝく、周防國都濃郡、二俣神社の縁起ニ、建御名方神出雲より遁来て此地ニ隱れ住ひしを、建御雷神たち、跡を覓て追来るしらバ、スいと云て立去り、故其国を周防と云、其より信濃国ニ行て、隱れ住ひしを、又追出坐しころバ、其所をも亦諏訪と申住ひしとぞ、是ハ真の縁起の文ニ、ゆゝしぞ、芳樹ゲ暗ニ云々るを記し、つ、己此五七年前、古事記標注を著しく時周防の古傳を、同国熊毛郡小周防の地として、記しおましを、此紀の標注をとのをとて、無慮反古の中より、彼聞書を捜出さきバ、此ニ書記ぞ正しき方なる、然ニ万葉四ニ、周防在磐国山乎とあるハ、須波奈留と四言ふよゝゝしく、将當時既防てふ韵ニ、よゝ頽しころ、定がたし此歌ハ山口、忌寸若麻呂ゲ、天平二年六月ニよめきバ、今茲明治十二年より、實ニ千百四十八年のむかしなり、こゝきバ、必周防とハよむまじくおもはゆ、此防字をむド免、韻鏡一二三轉より、廿五六卅一二七、又四十二轉等ニ載ざるゝ、諸字ども、東高香當ふど、加行の濁聲ニ韻らしめ、上代必東高ふどくを云ざるしを曉る

諸木、國前臣、祖菟名手、物部君、祖夏花、令察其狀

べし、是ら物學びする人々の、心えおくべきなり故ゝ、周芳とハよまつ

○娑磨ハ、同国郡名ふて、和名抄ニ佐波と注し、波音馬と記せり○南望、按ニ是ハ惣て豊前国ニ係きゝを、娑婆より十六七里の海上を隔つきバ、賊の烟氣の見わべくもあらぬぞ、今案ニ娑婆より、豊前ハ直南ニ當り、彼郡の三田尻より船の往來繁々きバ、近望ふひし状ニ傳へなり○國前臣ハ、豊後国郡名国埼ふる国造、志賀高穴穂朝、吉備臣同祖、吉備都命六世、午佐自命定賜国造、是ハ何きも孝靈天皇の御末ふり○菟名手、豊後風土記ニ、豊国直等、祖とあり○物部君、舊事紀ニ大新河命、此命、纒向珠城宮御宇天皇、御世、元為大臣、次賜物部連、公、姓、又十市根命、纒向珠城宮御宇天皇御世、賜物部連公とあるハ、垂仁天皇の御世を云、然ニ此君の尸を通證集解等ニ疑ひて、連又首の誤りゝむと云へるハ、物部ニ公尸の例ハなしと思へるゝや、此氏人六国史ニ九十四人、見匝ゝる中、續紀廿六ニ、物部公蜷淵、同二十七ニ物部公牛麻呂てふ、人見匝たきバ公尸論ひなし

○神夏磯媛ハ、其地の魁帥ふて、威ひをきバ土人怖きて、神と

爰有女人、曰神夏磯媛、其徒衆甚多、一國之魁帥也、聆天皇之使者

ハ称たむ○磯津山、今菟狹川と、御木川との間ヨ、清水村あヲ、若シハ是ら○上枝云々、是ハ上代の礼幣ヨて、大事を行をむとをらヨハ、榊枝ヨ鏡劔等を挂ヲ、物て神事よりたゞすれヲ、神代紀ヨハ、上枝ニ懸ハ坂瓊之五百箇御統中枝懸ニハ咫鏡、下枝懸青和幣白和幣と、なりて、古語拾遺もれたゞ○素幡、凡罪を謝ー服ふヨ、白色を用るの史ヨ見匝たるも、此條を始とす、神功紀ヨ新羅王ゲ、素旆而自服、素組以面縛、欽明紀ヨ新羅云々、舉白旗投兵降首、推古紀ヨ新羅王、惶之舉白旗云々、常陸風土記ヨ、寸津毗賣、懼悚心愁表、舉白幡云々記の雄略段ヨ、志幾之大縣主ゲ、罪なりて死を免まむと、白犬を繫ま、鈴を著とるも其類ま、り、後世降伏の表ヨ素を用るもの是ヨ本づヲヲ

至、則拔磯津山賢木、以上枝、挂八握劔、中枝、挂八咫鏡、下枝、挂八尺瓊、亦素幡樹于船舳、參向而啓之曰、願無下兵我之屬類、必不有違者、今將歸德矣

○鼻垂ハ、鼻洟ヨなりて、鼻頭の低さる、即準鼻ヨて、其人の鼻形を以て、名ヨ呼たーたヲ、○菟狹川ハ、豐前国宇佐郡を流る川あるヲ、神武紀ヨ注せヲ○耳垂字の如く、鼻垂ヨ准、ヲ知るべー、和名抄ヨ、耳垂、辨色立成、美々大比と注せり○御木川、續紀十三ヨ、豐前国仲

唯有殘賊、者一曰鼻垂、安假名號、山谷響聚、屯結於菟狹川上、二曰耳垂、殘賊貪婪屢略人民、是居於御木川上、三曰麻剥、潛聚徒黨、居於高羽川上、四曰土折猪折、隱住於緑野川上、獨恃山川之險、以多掠人民、是四人也、其所據並要害之地、故各領眷屬、爲一處之長也、皆曰不從皇命、願急擊之勿

津郡擬少領、无位勝東人とあるも、此地より出くる姓なて、後郡名とあり、上下ゑ分置し、和名抄郡名、部ゑ、上毛、加牟豆美介、下毛と注せり、筑後風土記ゑも、上膳縣と書々るを、土人む上毛下毛と云、又御木川ハ今高瀬川と云て、其郡を北ゑ流きて、海ゑ入る○麻剥ハ、見ゑ麻の皮を剥て、活とくる状を示し、潛人民を掠むる意ゑや○高羽川ハ、豊前国の郡名、田川ゑて、其地の川を云、○土折猪折ハ、一人の名ゑて直土ゑ猪の如居てふ意を負くり○緑野川、詳なくば豊前人河江直種云、企救郡貫村を流る川を緑川と云ふ、水原ハ京都郡企救郡の間、四極山より流き出て、海ゑ入るまで一里餘の、小川なりと云、り○武諸木、上に多臣の祖とあり○赤衣褌

失於是武諸木等、先誘麻剥之徒、仍賜赤衣褌、及種種奇物、兼令搗捕誅之、天皇遂幸筑紫、到豊前國長峽縣、興行宮而居、故號其處曰京也

不服之四人、乃率己衆而參來、悉

た、赤き衣と褌とな り、万葉十二ゑ、赤帛之純裏衣云々○搗ハ、宇書ゑ以手指麾也と注せり招の活きたるなり○四人、原本三人ゑ作きり、集解ゑ改くるゑ従ふ○豊前国、和名抄ゑ豊前ハ止與久迩乃美知乃久知とあり、案ゑ国郡名ゑ、前後あり上下なるハ、京ゑ近方を前と云上と云、り、是ハはゞしゑ人ゑ云のミ○長峽ハ、同国京都郡ゑ在む、土人ゑ問べし○京ハ和名抄ゑ、同国郡名京都、美夜古と注せり○碩田ハ、豊後国の郡名ゑて、

冬十月、到碩田國、其地形廣大、亦和名抄ゑ大分、於保伊多と注し、土人むオイタと云、り○速見も、同国の郡名なり、按ゑ豊前より出生ゑハ、速見次ゑ碩田なり○鼠石窟ハ豊後国

麗因名碩田也、碩田、此云於保伊多、岐陀到速見邑有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕而、自奉迎之、諮言、茲山有大石窟、曰鼠石窟、有二土蜘蛛、住其石窟、一曰青、二曰白、又

志古蹟部ヨ、鼠於直入縣禰疑野、有三土蜘蛛、一
巖窟二所、並在曰打猨、二曰八田、三曰國摩侶、是
石垣荘北石垣五人、並其爲人強力、亦衆類多之、
村、俗曰鬼岩屋皆曰不從皇命、若強喚者、興兵距
蓋土蜘蛛之賊大五六尺窟戸
所礫居也、高一
潤七八尺、深二
丈餘巨石疊築、焉
頗似非人為、其
上竹樹鬱叢、両窟大稍同○青白ハ顔色ヨヨきる名ヨや○土蜘蛛ハ、神武紀に
注一つ○直入ハ、豊後国の郡名ヨて、和名抄ヨ奈保里と注し、下ヨ直入物部ノ神
とも見也同国風土記に、郡東垂水村有桑生之、其高極陵枝幹直美、俗曰直桑村、
後人改曰直入郡○祢疑野、同国風土記直入郡、條ヨ、勅歴勞兵衆、因謂祢疑野云
々或書に其地直入郡
柏原村ヨりと云、り
○來田見豊後
風土記、直入郡、天皇惡之、不得進行、即留于來田
條ヨ、奉膳之人、見邑、權興宮室居之、仍與群臣議
擬炊於御飯、令之曰、今多動兵衆、以討土蜘蛛、若
汲泉水、即有蛇其畏我兵勢、將隱山野、必爲後愁、
竈、於茲天皇勅則採海石榴樹、作椎爲兵、因簡猛
云、必將有鬼萬卒授兵椎、以穿山排草、襲石室土
令汲用因斯名
曰鬼泉、今謂球
覃鄉者、訛也、或
書ヨ同郡ヨ朽
網鄉と云地あ
りと云、り○與
宮室、同国風土
記ヨ、宮處野ヨ
リて、朽網鄉所
在之野と、云、り
○海石榴、和名
抄ヨ、椿木名也
和名豆波木、楊
血流至踝、故時人其作海石榴椎
之處、曰海石榴市、亦血流之處、曰
血田也、復將討打猨、俓度禰疑山、

氏漢語抄云、海石榴和名同上、時賊虜之矢、横自山射之、流於官醫心方本草和名等、並椿木葉軍前如雨

をよめり、椿は夕マツバキともキヤンチンとも云て、高峯梢に多く枝を分形漆に似て臭氣ありと、本草啓蒙に云、り、伊藤長胤ゲ、秉燭譚に、今云ツバキハ、山茶と云るより記せり○石室ハ、石窟を誤れり、イハヤとよむべし○稲葉川或書に、直入郡朽網郷に、稲葉村ありと云、り○血流至踝、神武紀に、流血没踝和名抄に、踝、足骨也豆不奈岐、名義類聚抄もれなし○海石榴市、豊後風土記大野郡、條に、海石榴市血田、並在郡南、原本曰、字を落せり、古本によりて補ふ○血田詳なるべし○徑を原本徑に誤れり、徑ハ徑の省文なり

○城原ハ、直入郡米納村にて天皇更返城原而、卜於水上、便勒今城原ハ幡の祠なり○柏峽兵先擊八田於禰疑野、而破爰打大野、豊後風土記直入郡、條に、猨謂不可勝、而請服、然不聽矣、皆

柏原、郷、在郡南、昔者此郷、柏、樹多生、因曰柏原、郷○五寸皇極紀に溝瀆之流亦凝結、厚三四寸、記の上巻に、市寸嶋比賣命、又田寸津比賣命、夫木集十八に、行やらで、雪の尾花と見つるかな、一寸二寸の、駒にまがへて、是も馬の長四尺を定尺とし、其より餘まるを幾寸と云、より、世事百談に記せり○蹈石、豊後風土記直入郡、條に、蹶石野、在柏原、郷之中、天皇欲伐土蜘蛛之賊、幸於柏峽大野云々、因曰

自投洞谷而死之、天皇初將討賊、次于柏峽大野、其野有石、長六尺、廣三尺、厚一尺五寸、天皇祈之曰、朕得滅土蜘蛛者、將蹶茲石、如柏葉而擧焉、因蹶之、則如柏上於大虚、故號其石曰蹈石也、是時禱神、則志我神、直入物部神、直入中臣神三神矣

蹶石野○志我神、諸注式ヨ見ヱ、筑前国糟屋郡志加海神社を引出たるハ非ナリ、彼地ハ筑前風土記ヨリも、資河と清音ヨよめ、志我ハ必豊後国の地名ナルベシ○直入物部神ハ、直入郡ヨリて、饒速日命を祭ル〜ヨリや、是を通證ヨ豊前国企救郡ヨリ、説るも亦非ナリ○直入中臣神ハ上ヨリ、天兒屋命を祭ル〜ヨリや、以上三神ハ式に洩ル、今世ニも知る人なく、埋ル果つるハ口を〜ま業ナリ、是をも通證ヨハ、豊前国仲津郡ナる郷名、中臣を引出ヽるハ非ス

○高屋宮、和名抄ヨ大隅国肝属郡郷名鷹屋と云リ、此地ヽ

十一月、到日向國、起行宮以居之、

是謂高屋宮、十二月癸巳朔丁酉、

○丁酉五日○襲国ハ、大隅国の郡名贈唹ヨて、贈ヨ唹の韻を加、二字ヨ定メ給ヘヨ、續紀三十九ヨ、大隅国贈於郡、曾乃峯

議討熊襲、於是天皇詔群卿曰、朕聞之襲國、有厚鹿文、迮鹿文者、是兩人熊襲渠帥者也、衆類甚多、是謂熊襲八十梟帥、其鋒不可當焉、

上火炎大熾、同五ヨ、日向隼人、曾君細麻呂、同三十ヨ、曾公足麻呂ナど、曾とのミ呼傳ヘリ

少興師、則不堪滅賊、多動兵、是百姓之害、何不假鋒刃之威、坐平其國、時有一臣進曰、熊襲梟帥、有二女、兄曰市乾鹿文、乾云賦、弟曰市鹿文、容既端正、心且雄武、宜示重幣、以攜納麾下、因以伺其消息、犯不意之處、則曾不血刃、賊必自敗、天皇詔可也

○厚鹿文、和名抄ヨ、大隅国姶羅郡、郷名鹿屋と云リ、文ヱア ヤの略ナリ○以攜納麾下、注ヨ鹿文、字書ヨ迮、迫迮也、と注セリ、即厚ヨ對ヘ、迮と云リ鹿文ハ、上ヨリおお ド○渠帥ハ、勇男ナリ○市乾鹿文の、乾ヒの轉、鹿文ハ父名を襲リ○麾下ハ、御許ナリ史記魏其武安侯傳ヨ、呉將麾下、注ヨ謂大將之旗○消息ハ、在形ヨて、

續紀にハアリサマと訓り、是ハ字音よりも讀なゝひ、催馬樂淺水よ、美毛止乃加太知、世字曾已之云々、御許の形消息ーあり、拾遺集よ門の前を渡るとて、せゝそきいひいきて云々、易下象傳よ、天地盈虛與時消息、大全よ謂進退と注ー、史記歷書よ、建立五行起消息、注よ乾者陽生為息、坤者陰死為消也○不血刃、晉書王濬傳よ、發蜀兵不血刃攻無堅城○可、顯宗紀よ制曰可

○幕下ハ大所なり、字書よ軍行無常居曰幕、是ハ幕府と云

於是示幣、欺其二女、而納幕下、天皇則通市乾鹿文、而陽寵、時市乾よおなゝ○醇酒新撰字鏡よ、鹿文、奏于天皇曰、無愁熊襲之不醲厚酒也、加良支酒、○父ハ、仁賢紀よ注べー

服、妾有良謀、即令從一二兵於已、○不孝、隣女和歌集よ、いふー

而返家、以多設醇酒、令飲已父、乃への跡をかと

醉而寐之、市乾鹿文、密斷父弦、爰くおほゆれど、

從兵一人進、殺熊襲梟帥、天皇則親よつりふる、道ぞらーよ、

惡其不孝之甚、而誅市乾鹿文、仍とりまで、オヤニツカヘズと、よゆゝく思へ

以弟市鹿文、賜於火國造

ど、姑舊讀よ從ふ、扨支那国も不孝の土風よて、親を殺ハ常ふまど、皇国よてハ、天皇の御為よ仇ゝぞーて、殺ーその古、ハ聞ゆず、履中紀よ隼人刺領中ゲ其君を弑ー、誅よ免まざるーも、天皇の御為よて、其趣此件と專ふおゝゝ○火国造、国造本紀よ、瑞籬朝大分国造同祖、志賀多奈彦命兒、遲男江命、定賜国造とありて、天孫本紀、饒速日命六世孫、處よ、建弥阿久良命、高屋大分国造等、祖とられバ、饒速日命の御末なるべー、高屋ハ連を脫せるゝ、姓氏録よ高屋連、饒速日命十世孫、伊已止足尼、大連之後也、ふど併セ思ふよ、火国造と肥、直とハ、素より別姓なゝを弁べー、通證の説失まり、扨市鹿文を以て、火国造よ賜むーハ、婚の功を報イてまり○御力嬢、

十三年、夏五月、悉平襲國、因以居

剣ハ佩ものゝ名、佩を延、云て、万葉十三よ、御

於高屋宮、已六年也、於是其國有

佩乎劔池と、枕詞ゝおけるを見るべし、其れ天皇の御身ゝ添へしめ給ふ也

佳人曰御刀媛、御刀此云彌波迦志、則召爲妃、生豐國別皇子、是日向國造之名ゝ、後に負ひ

始祖也

名ゝや、万葉十一ゝ、劔刀身副妹之、同十四ゝ、都流伎多知身爾素布伊母乎、ゝど多ゝり○豊国別皇子ハ、豊国ゝ封ぜらるゝにや○日向国造、国造本紀ゝ日向国造、輕嶋豊明朝御世豊国別皇子、三世孫、老男定賜国造

○己酉十二日

○子湯縣ハ、日向国の郡名ゝて、和名抄ゝ、兒湯、古由と注せる○丹裳ハ、兒湯郡ゝ在べし

○日向、推古紀號其國、曰日向也

十七年、春三月、戊戌朔己酉、幸子湯縣、遊于丹裳小野、時東望之謂左右曰、是國也直向於日出方、故

に宇摩奈羅摩、辟武伽能古摩とゝり、馬ゝバ日向の駒ゝて、ヒムカゝるを、和名抄ゝ、比宇加と注せるゝハ、音便讀を其儘記せるゝり、此国を記の上巻ゝ、朝日之直刺国、夕日之日照国と、詔る如く、廣く打霽たる国なれバゝり、同国風土記ゝ、此国地形、直向扶桑、宜号日向也云々、又天書の此件ゝも、帝遠望東謂近臣曰、此国直向於扶桑名之、謂日向国とあるゝ扶桑ハ、古音ゝ扶桑とよむべし、然バ此ハ日向とよゝて、日向の一名を傳たるゝ、是ハ甚強たるやうゝるゝど然ゝよまざるゝバ、風土記、及天書の文を成ゝず、此扶字をヒとよゝるハ、国典字徵楸、字の條ゝ、例を引て注しおきつゝ、扨此ゝ向扶桑とハ、扶桑木の生立てる、伊豫国ゝ向ゝるにて、其ゝ伊豫風土記ゝ、上古温湯谷上有大樹、一曰椋木、一曰臣木、其樹高聳、碧落其枝葉若垂天之雲と、ある椋ゝムクとも、チサともよめるど、此の趣扶桑ゝ當ゝり、是を扶桑と云ゝ日避木ゝて、日影を避ゝるゝ高く廣ゝ生ゝりと云、義にて、号けむを、西土人其よゝ音ゝ、合る字を當て傳へしにや、此樹上代伊豫国の湯谷ゝあるゝ證ハ、山海經ゝ、湯谷上有扶桑、十日所浴、在黑齒北、云々、淮南子天文訓ゝ、日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明ゝど、惣て我古傳の片端を聞傳、私意を加て書おゝるゝり、故に木の形狀をも、うゝらむと作り說ひ、南史扶桑国傳ゝ、扶桑葉似桐、初生如笋、国人食之、實如梨而赤、其皮為布、以為衣、亦以為綿と云、梁書五十四、扶桑国のゝを記せる所の說も志うゝ、本草綱目ゝ、扶桑、一名佛桑、又宋槿云々、時珍云、東海日出處、有扶桑樹、此花光豔照日、其葉似桑因以比

之、後人記為佛桑、乃木槿別種、十洲記ニ、扶桑葉似桑樹、長數千丈、大二千圍、兩兩同根、更相依倚、是以名之扶桑、など、併考ニ、更ニ一定せざれど、湯谷と云、數千丈と云、るなどハ、伊豫国湯谷ニ在りを、正しく傳へたり、此樹枝隣国ニ廣ぎて、山海ニ根刺りなむ、今も伊豫国の海中より、扶桑木を産する、人の見聞もる處あり、因ニ云支那国の古書どもニ、我國を扶桑国と云、るを、つゝく思ふニ、實ハ四国以東を指て、扶桑国とハ云、けむ、其ハ南史七十九に扶桑在ニ大漢国東二萬餘里ニ地在ニ中国之東ニ云々、有ニ文字ニ以ニ扶桑皮為ニ紙云々、扶桑東千餘里、有ニ女国容貌端正、髪長委ニ地云々、食ニ鹹草とあり、是ハ九國二嶋を倭国とし、四國以東を扶桑国と分、とる、其趣ニ南史を見て知るべし、羌に女国とあるハ、八丈嶋ニて、彼地ニ住める婦女の髪ハ、背ニ垂き地ニ委るヲ、尺ニ餘きるを、今も現ニ見る處なり、鹹草ハ八丈ニて、アシタ草と唱、羌ニ雑て常食とす、鹹草ハ諸毒を去り、氣血をめぐらせ、ゆ、土人病なく、れのく百歳餘ニ至きり、猶委くハ七嶋日記を見るべし

○陟野中大石、原本陟を渉ニ作きり、類聚国史ニ據て改む

是日、陟野中、大石、憶京都而歌之曰、波辭枳豫辭、和藝幣能伽多由、○波辞枳豫辞ハ、愛きニて、豫辞を助辞ニ、万葉ニ愛ハ師ともよめり、ハ師もおなじ○

能摩保邏摩、多多儺豆久、阿烏伽枳夜摩、許莽例屢、夜摩苔之、于屢和藝幣能伽多由ハ、從ニ吾家ニ方ニて、吾家の約なり○區毛位多知區暮ハ、雲井立來ニて、暮ハ助辞なり、扨雲井ハ雲居にて、動らざるを云、やゝ〜ふるまど、万葉十一ニ、香山爾雲位桁曳ともよめきバ、宮を本惣て苔を苔ニ誤きり、類聚国史ニ據て改メつ、前後改メたるゝの皆然り○區珥能摩保邏摩ハ、国の真秀ニて、秀とハ顕きゝる處を云、邏摩ハ助辞ニて、奴を播磨風土記ニ、奴良麻と云、るふれふゞ○多多儺豆久ハ、記傳ニ委附の略と云、其を疊附にて、山の重なるに係る枕詞なり○阿烏伽枳夜摩、許莽例屢ハ青垣

破試、異能知能、摩曾祁務比苔破、多多瀰許莽、弊遇利能夜摩能、志邏伽之餓延塢、于受珥左勢、許能固、是謂思邦歌也

区毛位多知区暮、夜摩苔波、区珥

山籠まるゝて、此時三月ふれバ、草木の立繁り、山も垣の如くめぐりて、国ハ其内ゝ籠まりとなり、万葉一ゝ、畳有青垣山、山神乃、同十二ゝ、田立名付青垣山之隔者、ゝど多うり、上代の雅言なり○夜摩苦之于屢破試ハ、大和一愛一ゝて、之ハ助辞なり、扨于屢破試とハ、心愛ゝて、心をバ、ウラとも、ウレとも云、愛ハ万葉ゝ愛妻とも、又愛きやしゝど併知るべし、原本屢を漏ゝ作まり、其悪うし泣ど、今類聚国史ゝ據る○異能知能ハ、命之なり○摩曽祁務比苦破ハ、将正人者の、轉なるべし、記ゝ麻多祁牟比登波とあり、全れむなり○多多瀰許弊ハ、疊薦ゝて、縁ゝ係る枕詞なり、原本瀰を漏ゝ誤まり、類聚国史ゝよりて改む○弊遇利能夜摩能ハ、大和国平群郡の山を云、○志邏伽之餓延塢ハ、白檀之枝をなり、万葉十ゝ、足引山道不知、白杜我、枝母等乎乎介、雪落者、後拾遺集ゝ、紅葉ちる、秋の山べハ、ちらしの、下むよりまを道ハ見ゑられ、記ゝ白檮をカシとよみ、此紀ゝ赤檮をイチヒとよめり、何ものも相似たる樹ゝまゝど、檀ハ赤檮ゝ対て、カシともシラカシとも云けむ、記ゝハ久麻加志ゝ作まり○于受珥左勢を、髻華ゝ挿せなり、髻華ハ推古紀ゝ注べし○許能国ハ、此子ゝて、大和ゝて正けむ人々を指ゝ、記ゝも曽能古とあり、扨此御歌を、記ゝハ三首ゝ分ち、日本武尊伊勢ゝて、薨ゝ時の、御歌ゝ傳へ、ゝり孰是ゝむ○向京ハ、日向国那珂郡ゝ、都

十八年、春三月、天皇將向京、以巡

と云地なり是なり○巡狩、漢書郊祀志ゝ、天子五載一巡狩、

狩筑紫國、始到夷守、是時於石瀬河邊、人衆聚集、於是天皇遥望之、詔左右曰、其集者何人也、若賊乎、用事泰山、白虎通ゝ、王者所以巡狩者何、巡者循也、狩牧也、為天子循行守牧民也、孟子ゝ、巡狩者巡所守也云々、猶書の舜典、礼の王制等ゝ、巡守と見ゑたり、おふどるなり、按ゝ此一章ハ頗る錯簡あるら、將筑前国ゝ夷守又石瀬と、云へる地名あるゝハ、無慮筑紫国とハ記しゝるゝ、今日向国諸縣郡ゝ夷守嶽と云所あれバ、石瀬も其邊りゝあるべし、能土人ゝ問ふべし○遥望、類聚国史ゝ、遥を遠に作まり○兄夷守、を地名ゝよまる名○諸縣君ハ日向国の郡名ゝ、依りとる姓ゝて、應神紀ゝ諸縣君牛諸井と、云人も見ゆ

乃遣兄夷守弟夷守二人、令覩、乃弟夷守還來而、諮之曰、諸縣君、泉媛、依獻大御食、而其族會之

○甲子三日○夏四月、壬戌朔甲子、到熊縣、其處熊縣ハ肥後国の郡名ゝて、和名抄ゝ球麻○有熊津彦者兄弟二人、天皇先使壬申十一日○葦北、肥後国の郡名○山部阿弭古の、山部ハ姓ゝて、阿弭古ハ尸ゝ、神功紀ゝ、依網吾彦、姓氏録ゝ、輕吾孫ゝど見也、原本祖、上ゝ之字ゝ、衍ゝ、バ削る○水嶋、肥後風土記ゝ、球磨縣、乾七里海以獻焉、故號其嶋、曰水嶋也、其泉中無水、不知所爲、則仰之祈于天神地祇、忽寒泉從崖、傍涌出、乃酌

徵兄熊、則從使詣之、因徵弟熊而不來、故遣兵誅之、壬申自海路、泊於葦北、小嶋而進食、時召山部阿弭古祖小左、令進冷水、適是時、嶋中有嶋、稍可七十里、名曰水嶋、今猶在水嶋崖也

嶋出寒泉、逐潮、高下云々、万葉三ゝ、長田王被遣筑紫、渡水嶋之時歌二首、如聞真貴久奇母、神左備居賀、許禮能水島、すゝ葦北乃野坂乃浦從、舟出為而、水島爾将去、浪立莫勤、原本其泉、下今猶を、顛倒せり今改む

○火国ハ、肥前肥後を云、和名抄ゝ、肥前、比乃三知乃久知、肥後、比乃美知乃之利と注し、即肥前肥後ゝ、を、和銅の格ゝ、火を嫌て肥ゝ改ゝ、此件の古傳を、肥前肥後の風土記ゝ、

五月壬辰朔、從葦北發舟、到火國、於是日没也、夜冥不知著岸、遥視火光、天皇詔挾杪者曰、直指火處、因指火往之、即得著岸、天皇問其火光處曰、何謂邑也、國人對曰、是八代縣豐村、亦尋其火、是誰人之

崇神天皇の御世と、此御世とのみ傳、八代郡火邑と云ふ、其國曰火國

和名抄に、同郡肥伊郷あり、肥前風土記にハ葦北火流浦とあり、扨爰に到火国と云ふを思ふに、不知火ハ、八代の海より、天草嶋の邊に多く見ゆるを、こゝ處を、火国とハ云ふなり○挾抄、和名抄大須本に、加知度利と注せり、能執あり○豊村、和名抄肥後国、八代郡豊福郷、日本靈異記に、同郡豊服郷、豊服廣公ふど云人見ゆ○非人火、是ハ不知火ふて、筑紫の枕詞に云、此火今も六七月の間、天草島を中ふして、海上に數百萬の火を照せるハ、誰もよく知ぬ、此火の出る左右の国を肥前肥後とハ云

六月、辛酉朔癸亥、自高來縣、渡玉杵名邑、時殺其處之土蜘蛛津頬

○高來縣ハ、肥前国の郡名にて、和名抄に多加久と注せり○玉杵名邑ハ、遠、不見人、居、天皇曰、是國有人乎、

肥後国の郡名ふて、和名抄に玉名に作る、多萬伊奈と注せる、是ハ国郡名を二字に、定る

時有二神、曰阿蘓都彦阿蘓都媛、忽化人、以遊詣之曰、吾二人在、何無人耶、故號其國、曰阿蘓

ひし時、杵字を畧しるども、土人ハ音便に王杵名と、唱る儘を注せり、然ど今ハ土人も、タマナと云、案に高來郡ハ、肥前国嶋原より、諫早までふるを、玉名郡ハ、肥後国西北の海岸ふまバ、海路より出坐しハ、是ぞ順路ふるべき○丙子十二日○阿蘓国ハ、肥後国の郡名なり、名義ハ次に何無人耶、と云、何の轉あり○阿蘓都彦云々、式に阿蘓郡三座、健磐龍命、神社、阿蘓比咩、神社、国造、神社とありて、阿蘓都彦、神を除くなり、こゝまバ阿蘓都彦と申ハ、此健磐龍命なるむろ、もと素より別神ら、猶よく考ふべし、阿蘓社大宮司系圖に、建磐龍命を神武天皇第二の皇子と記せり、國造本紀に、神野、国造、瑞籬、朝、御世、神八井耳命、孫、建五百建、命、定賜国造とあり、是由ひらげに聞ゆれど、神野てふハ何地なるむ、丹波讃岐等の地名にハ見ゆ、されど、此国造ハ下野国那須と、出羽、国とに挾まれ、バ、次て東国ふぞひらけむ、又阿蘓国造、瑞籬、朝、御世、火国造同祖神八井耳、命、孫、速瓶玉、命、定賜国造とありて、記に神八井耳命者、火君大分君、阿蘓云々之祖と

りかゝまで国造、神社ハ、速瓶玉命を祭りたるゆ疑ひなし、筑紫軍記ゑ、健磐龍命、娶草部吉見神女、阿蘇姫生子、名速甕玉命と記せり

○甲午四日○秋七月、辛卯朔甲午、到筑紫後國筑紫後国、和名抄ゑ筑後、筑紫乃三知乃之里御木居於高田行宮時有僵樹長○御木ハ、同国郡名ゑて、和名抄ゑ三毛ゑ作九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰概能きり、木をケとよゑる例ハ、上ゑ木此云開と、佐烏麽志、魔幣苑者瀰、伊和哆羅あるを見るべ〜○高田詳ゑらず○阿佐志毛能ハ、朝霜之ゑて、御木をミ消と云意ゑ、係者歴木也、嘗未僵之先、當朝日暉、

たる枕詞なり○瀰概能佐烏麽志、魔幣苑者瀰ハ卿ゑて前津君也、和訓栞ゑ君前ゑ侍従もる、公等を云といへ已、古今以下の詞書に、すゝち君と云、り○伊和哆羅秀暮の、伊ハ發語ゑて、和哆羅秀ハ渡るの延語、暮ハ助辞ゑり○瀰開能佐烏麽志、上ゑおなゞ、打返〜たるハ、古歌の常なり○歴木和名抄ゑ、舉樹、和名久沼木、日本紀私記云、歴木新撰字鏡ゑハ、櫪をよゝ、万葉十二ゑ、度會大河邊若歴木云々○杵嶋ゑ、肥前国の郡名ゑて、和名抄ゑ岐志萬と注せり、同国風土記ゑ、御舩泊此郡磐田杵之村、于時從舩戕洞之穴、冷水自出自成一島云々、可謂戕洞島郡、今謂杵島郡訛也、又曰杵嶋郡縣南二里、有一孤山、從坤指艮三峰相連、是名曰杵島云々○阿蘇山、日本後紀五ゑ、太宰府言、肥後国阿蘇郡、山上有沼、其名曰神霊池、水旱経年未嘗増減、而今無、故涸減二十餘丈云々、筑紫風土記ゑ肥後国閼宗縣、縣坤二十餘里有一発山、曰閼宗岳、頂有霊沼、石壁為垣云々、此山の霊妙なるゆハ、北史九十四ゑも記傳、〜り、筑後風土記ゑ、三毛郡云々、昔

則隱杵嶋山、當夕日暉、覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國

本瀰を瀰ゑ誤もり類聚国史ゑよりて改む○魔幣苑者瀰ハ卿ゑて前津君也、和訓栞ゑ君前ゑ侍従もる、公等を云といへ已、古今以下の詞書に、すゝち君と云、り○伊和哆羅秀ハ渡るの延語、暮ハ助辞ゑり○瀰開能佐烏麽志、上ゑおなゞ、打返〜たるハ、古歌の常なり○歴木和名抄ゑ、舉樹、和名久沼木、日本紀私記云、歴木新撰字鏡ゑハ、櫪をよゝ、万葉十二ゑ、度會大河邊若歴木云々○杵嶋ゑ、肥前国の郡名ゑて、和名抄ゑ岐志萬と注せり、同国風土記ゑ、御舩泊此郡磐田杵之村、于時從舩戕洞之穴、冷水自出自成一島云々、可謂戕洞島郡、今謂杵島郡訛也、又曰杵嶋郡縣南二里、有一孤山、從坤指艮三峰相連、是名曰杵島云々○阿蘇山、日本後紀五ゑ、太宰府言、肥後国阿蘇郡、山上有沼、其名曰神霊池、水旱経年未嘗増減、而今無、故涸減二十餘丈云々、筑紫風土記ゑ肥後国閼宗縣、縣坤二十餘里有一発山、曰閼宗岳、頂有霊沼、石壁為垣云々、此山の霊妙なるゆハ、北史九十四ゑも記傳、〜り、筑後風土記ゑ、三毛郡云々、昔

者棟木一株、生於郡家南、其高九百七十丈、朝日之影蔽肥前国、藤津郡多良之峯、暮日之影、蔽肥後国山鹿郡荒爪之山、因曰御木国とあり、按ふ件地ハ三毛郡より直東西に當ゝ〳〵バ、風土記の傳、ぞ正〳〵こゝるべき、往年鶴峯戊申ゞ己ふ語りらく、此樹一年ふ五寸づゝ延ても、九百七十丈ふ至るまでハ、一万九千四百年を經たり、神代の悠遠思ふべし〳〵と云き、實ふ然ルべし〳〵

○丁酉七日○八女縣、持統紀ふ、筑紫国上陽咩郡と見也、和名抄筑後国郡名、上妻、加牟豆萬、下妻准上とあり、妻ハ八女より、轉じたるか、肥前風土記ふ、舉幡順風放遣、于時其幡飛

丁酉、到八女縣、則越前山、以南望粟岬詔之曰、其山峯岫重疊、且美麗之甚、若神有其山乎、時水沼縣主、猿大海奏言、有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名由此起也、八月到的邑而進食、是日往墮於御原郡姫社之社とある所を云るか、土人ふ問べし〳〵

曰浮羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗○前山、類聚国史ふ藤山ふ作號盞曰浮羽

膳夫等遺盞、故時人號其忘盞處、

きり、通證ふ鏡山氏曰、今云御前山と云、り、鏡山氏とハ高良玉垂神社の舊社司なり○粟岬、通證ふ鏡山氏曰、今云黒岬、今按粟疑粟之誤寫と云へり○水沼ハ、筑後国郡名ふて、和名抄ふ三潴ふ作きり、縣主ハ神代紀ふ、水沼君とのるにおゝゝこのるべし〳〵○八女津媛詳ならず○的邑、和名抄ふ筑後国郡名、生葉、以久波と注せり、爰ふ的字をよめる例ハ、和名抄ふ射場、以久波止古路とあり的所なり、應神紀ふ、的戸田宿祢、新撰字鏡ふ、的由久波と注せり、即轉じたるまて射合く、是を的と云、るハ日處なり○進食ハ、御食なり、凡物を飲も食も著も、又身に受て為るをも、惣てヲスとも、メスとも云て、其例引ふ堪ず○遺盞筑後風土記ふ、天皇勅曰、惜哉朕之酒盞、因曰宇枳波夜郡、後人誤號生葉郡、古注ふ俗語云酒盞為宇枳とのり、記の上巻ふ、八千矛神と、須勢理毘賣命と、御盞を取易〳〵ゆゝを、宇伎由比と記し、即盞結なり、同下巻ふ美豆多麻宇岐とあるハ、瑞玉盞なり○浮羽ハ右ふ引るゝ、風土記ふ宇枳波夜と、詔るを略なり、波夜ハ歎息の辞

○癸卯廿日○自日向と八、彼国ゑ六年も坐〻故ゑ○甲申

十九年、秋九月、甲申朔癸卯、天皇至自日向

四日○五百野皇女八、倭姫命の御姪ゑ○祭天照大神、倭姫

二十年、春二月、辛巳朔甲申、遣五百野皇女、令祭天照大神

世記ゑ大足彦忍代別天皇、二十年、倭姫命年既老者、不能仕吾足奴止宣天齋内親王仁可仕奉、物部八十氏人定給天、十二司寮官等遠波、奉移五百野皇女久須姫命、春二月遣五百野皇女、御杖代止志天、多氣宮造奉天齋慎美令侍給支云々、式ゑ伊勢国多氣郡竹神社ありて、同郡ゑ多氣郷、又齋宮村ゑどあり、大神を祭〻ゑ〻地ゑや、古歌ゑ竹、都とあるも、此地ゑるべ〻

○壬午三日○令察八、按察使の始ゑるべ〻

二十五年、秋七月、庚辰朔壬午、遣武内宿祢、令察北陸、及東方諸國

○壬子十二日

○日高見国、常陸風土記ゑ、分筑波茨城郡、七百戸置信太郡此地本日高見国云々、式ゑ陸奥国桃生郡、日高見神社、大祝後釈に山ゑく〻て四方打霽たゑる地を云ゑと云り年治按、東国ゑる日高見八、日近見の轉ゑて、京地より号たゑ〻ゑや、大祝詞ゑ見色〻〻ゑ八、皇国の惣名ゑて、海外国とも日の低り〻〻下ゑ在ゑゑ、對て、日を高く仰き見るゆゑ、然云り、其ゑ委祝詞弁蒙ゑ記〻おけをバ爰ゑハ云ず○椎結を、カミヲアゲとよめゑゑハ、髪を結び挙ゑるを云て、被髪ゑ〻〻ぞ、漢書西南夷傳ゑ、自滇以北君長以十數、邛都最大、此皆椎

之地形、且百姓之消息也

二十七年、春二月、辛丑朔壬子、武内宿祢、自東國還之、奏言、東夷之中、有日高見國、其國人男女、並椎結文身、為人勇悍、是揔曰蝦夷、亦土地沃壤而曠之擊可取也秋八月、熊襲亦反之、侵邊境不止

結云々、注ニ結讀曰髻、如椎之形也、後漢書度尚傳ニ、移深林遠藪、椎髻鳥語之人、注ニ椎、獨髻也、又漢書酈陸傳ニ、魋結箕踞云々、注ニ椎髻者一撮之髻、其形如椎ナド併見るべし○文身をミヲモドロケとよめるハ、マダラと云ふおなじく、身を黥まるを云、莊子ニ越人斷髮文身、史記周紀ニ大伯虞仲云々、文身斷髮、五代史雷滿傳ニ、文身短髮云々、按ニ身を文ハ、蝦夷人ニて、南史七十九皇国のことを記せる處ニ、文身国、在倭東北七千餘里とあるを見るべし○蝦夷ハ神武紀ニ注しつ

○己酉十三日 冬十月、丁酉朔己酉、遣日本武尊

○何處、舊讀ウツコとあり、古言のやうに聞ゆ 令擊熊襲、時年十六、於是日本武尊曰、吾得善射者、欲與行、其何處豆久とありて、イヅコと云ふさへ、古今以上も聞かず○弟彦公、舊事紀ニ、宇摩志摩治命、九 有善射者焉、或者啓之曰、美濃國有善射者、曰弟彦公、於是日本武尊、遣葛城人宮戸彦、喚弟彦公、故世孫、弟彦命あて是ハ○宮戸彦、大和志、葛上郡ニ、宮戸村あり○石占ハ、伊勢国の地名ニ、 弟彦公、便率石占横立、及尾張田子之稻置、乳近之稻置、而來則從

續紀十三ニ、至桑名郡石占、頓宮○田子ハ集解ニ愛智郡大喜村、南有蛸池、相傳昔曰田光、莊○乳近、集解ニ智多郡、有近崎村、與田光阻數村、相近蓋此地と云り

○稻置、成務紀ニ、国郡立造長縣邑置稻置、とある處ニ注べし

○嶮易、字の如く有形なり○ 十二月、到於熊襲國、因以伺其消息、及地形之嶮易、時熊襲有魁帥者、名取石鹿文、亦曰川上梟帥、悉集親族而欲宴、於是日本武尊、解

取石鹿文ハ、大隅国姶羅郡ニ、鹿屋郷なり上ニ厚鹿文迮鹿文の、二人あり市乾鹿文、市鹿

文云々、相似とる名なり取石髪作童女姿、以密伺川上梟帥、之ハ詳ならず、是宴時、仍劔佩裄裏、入於川上梟帥、をトロシとよ宴室、居女人之中、川上梟帥、感はむら、續紀九之宴室、居女人之中、川上梟帥、感頓宮、とあるを、其童女容姿、則携手同席舉杯令一本所石之、作其童女容姿、則携手同席舉杯令

○川上梟帥、和名抄大隅国、肝属郡郷名飲而戯弄、于時也更深人闌、川上川上○宴を舊梟帥且被酒、於是日本武尊、抽裄讀ニヒムロウ中之劔、刺川上梟帥之胸、未及之タゲと、訓めるど、此紀ゴ然るの見迄ざるバ、死、川上梟帥叩頭曰、且待之吾有宴とよむべし、所言、時日本武尊、留劔待之、川上ウタゲを打上

の切るなり、記ゴハ御室樂と傳なり、御ハ新の誤字にや

○解髪作童女姿上代男をる男也

梟帥啓之曰、汝尊誰人也、對曰吾、是大足彦天皇之子也、名日本童まで、髪を背ゴ垂しを、其状ゴ成ルつて、此件記の傳ぞ奉き○裄ハ、字書ゴ近身衣と注せり○感允恭紀ゴ有感情古語拾遺ゴ、約誓即感其玉云々○杯、和名抄ゴ盃をよゝ、四時祭式ゴ、洒盞をよゝ、是ハ酒器ゴて、高杯窪杯、俗ゴ湯桶飯筍ゴと准、知るべし、源氏梅枝ゴ、沈の箱ゴるゴの杯ふたつ居く、同若菜ゴ、沈のかけをんよつ御つきどもなつらしく、今めゆゝ云々、是ハ器をツキと云る例なり○戯乗、落久保物語一上ゴ、手ハ琴をふゝちゞ、はさくりつゝ云々、源氏野分ゴ、ゝの琴をかきまけくゴつゝ云々、弄ぶ状を云○人闌ハ、字書に闌、帛也と注せり、人少ゴなるを云、是をウスラグと云、ゴハ、薄ゴラグゴ辞を添たるゴて、曽丹集に、鴨の居る入江の氷うすくゴて、底のみくづも、らくゝをゴなるゴ

○賊賊、原本賊々ゴ作まり、集川上梟帥、亦啓之曰、吾、是國中之

解に熟田本ヨ
據リて、改メらるヨ
從フ○日本武
皇子、伴信友云、
川上梟帥ヨ對、
て、日本武と訓
べーと、按ヨ此
説よろしく聞
ゑつきど、日本
紀竟宴歌に、也
末度多介、仁之
比無賀志乃、久
爾遠宇知天云
々中臣宮處氏
本系帳ヨも、夜
麻登多祁天皇
命とあきバ、從
ひ〻〻し、此尊

強力者也、是以當時諸人、不勝我之威力而、無不從者、吾多遇武力矣、未有若皇子者、是以賤賊陋口以奉尊號、若聽乎曰聽之、即啓曰、自今以後、號皇子、應稱日本武皇子、言訖乃通胸而殺之、故至于今、稱曰日本武尊、是其縁也、然後遣弟彦等、悉斬其黨類、無餘噍、既而從海路還倭、到吉備以渡穴海、其

を天皇と崇申
せるハ、常陸阿
波等の風土記
ヨ例あり○餘

處有惡神則殺之、亦比至難波、殺柏濟之惡神、濟、此云和多利

噍、字書ヨ噍、嚼也と注せり、原本餘噍下、一字ありハ衍ヨり、古本ヨ无キヨ從ひて
削る、字ハ齊書王融傳ヨ、見ゑたり○穴海ハ、備後国安那郡の海なり、和名抄ヨ
安那を、夜須奈と注せるハ、土人陰門てふを忌て、唱易へるなるべし、舊事紀ヨ、吉
備、穴国造見ゑ、三代實録二十二ヨ、備後国安那郡人、安那豊吉てふ、人名も見ゑ
たり、然ヨ此郡今ハ海邊ヨ遠くねど、上代ハ深津郡をかけて、廣く穴と云ヒ
む○柏濟ハ、仁德紀ヨ見ゑたり○惡神、上代ハ海にも山にも、惡神ありて、人を
腦み苦ましむ
おとあやうりき

○神靈、神功紀
ヨ靈をよミ、神
代紀ヨ恩賴を
よゑり、是ハ御
靈の振ヨて、振
とむ賑きを云

二十八年、春二月、乙丑朔、日本武尊、奏平熊襲之狀曰、臣賴天皇之神靈、以兵一舉、頓誅熊襲之魁帥

扱振をフユと轉ド云、ゐハ、記の應神段ゐ、母登都流藝、須惠布由とゐり、即本劍未振ゐり、此神霊ゑ、御蔭ゐれゐドきゐを、神代紀ゐも注ヒき、然ゐ奥儀抄三ゐ、曽丹集ゐる、いとゆゐゑ、ゐひゐ知身さへいはぐゐゐ、ゑたすの出て、恩頼を先祖の霊とし、フユを冬とし

○禍害之藪、類聚名義抄ゐ、悪事をマガコトとよゑり、神代紀ゐ貪窮之本、飢饉之始、困苦之根、と云ゐ似たる語ゐり、呉志薛綜傳ゐ、亡叛逋逃之藪とゐり○日本武の下、尊字を脱せり、例ゐよりて補ふ、異愛下焉字を落せり、集解ゐ壷井本ゐよりて、補ゐるゐ

者、悉平其國、是以西洲既謐、百姓無事、唯吉備穴濟神、及難波柏濟神、皆害心以放毒氣、令苦路人、並爲禍害之藪、故悉殺其惡神、並開水陸之徑、天皇於是、美日本武尊之功、而異愛焉

○戊戌十六日

○豈強ハ、字の意ゐ、狹衣四ゐ、うちゐゐきゐ、つるゐき、淺ゐらずゐゐ

四十年、夏六月、東夷多叛、邊境騒動、秋七月、癸未朔戊戌、天皇詔群卿曰、今東國不安、暴神多起、亦蝦夷悉叛、屢略人民、遣誰人以平其亂、群臣皆不知誰遣也、日本武尊奏言、臣則先勞西征、是役必大碓皇子之事矣、時大碓皇子、愕然之失、逃隱草中、則遣使者、召來爰天皇責曰、汝不欲矣、豈強遣耶、何未對

○身毛津君ちゐ、わゐくーきゐで、思ひ惑ひ云々、和訓栞ゐ痛勝の意と云ゐ○豫を未至らぬ意ゐて、後撰集ゐ、露とけーたもとほすゐも、ゐれものを、ゐど秋風のゆゐき吹ら

の身毛も、美濃国の郡名武藝、賊、以豫懼甚焉、因此遂封美濃、仍て、和名抄に牟介と注せり、如封地、是身毛津君、守君、二族之氏人ハ、續紀二に、牟宜都君比呂、同卅六に、牟義都公、真依ふど見ゆ雄畧紀に、身毛君大夫、天武紀に、身毛君廣ふど見ゆ、津を畧たるゆて上の牟宜都君比呂と同人なり、姓氏録に、牟義公、景行天皇皇子、大碓命之後也、とあるを見るべし○守君、和名抄に、信濃国佐久郡、茂理郷あり、此地に依りたる姓なり、氏人ハ齊明紀に、守君大石、持統紀に、守君苅田ふど見ゆ、姓氏録に守公、牟義公同祖、大碓命之後也

始祖也

○始祖、下、原本也字を落せり、集解に古本に據て、補るに從ふ

○斧鉞、和名抄に、鉄鉞、萬佐加利、新撰字鏡に、鉄をも鉞をもよめり、萬佐も加利も双に因り

於是日本武尊、雄詰之曰、熊襲既平、未經幾年、今更東夷叛之、何日逮于太平矣、臣雖勞之頓平其亂、

とる名にて、神代紀に、蛇之鹿正ス大葉刈等の名を、併思ふべし、扨授斧鉞と云ハ、支那国の王らが、其臣をして征伐に行かしむる、時に云詞にて、爰に如此書くハ、彼を真似びとるなり、記に給比比羅木之八尋矛、とあるぞ正しき、傳、あるべきの村、神功紀に荷持田村獣、承恩則忘、見怨必報、是以箭藏

則天皇持斧鉞、以授日本武尊曰、朕聞其東夷也、識性暴強、凌犯爲寇、並相盜略、亦山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞徑、多令苦人、其東夷之中、蝦夷是尤強焉、男女交居、父子無別、冬則宿穴、夏則住樔、衣毛飲血、昆弟相疑、登山如飛禽、行草如走獸、

とも見ゑたり、是ハ村ヨレの加りたるか、安閑紀ヨ、竹村之地云々、惣て所と云べきを、フと云、又、神代紀ヨ、粟田豆田とよ、万葉ヨ原をもよめり、村邑ハ、大村小村の意ヨ見るべし○首を、オビトとよむべし、是ハ尸ふも云て、大人なり○姦鬼、此語經書ヨ多らまど、未清濁を詳ヨせず、頑をカタホとよみ、中昔の書ヨ、カタクナてゝ語志むし見ゑ、常語ヨも云まむ、決清音ふるべし、鬼ハ玉乃由久閑ヨ記しおまつ○無別ハ、別分めあゝの略○冬則宿穴云々、是ハ文選の序、禮記の禮運の語を、少易とるなり○如飛禽、今の蝦夷人も、こゝる業をもるハ常なり○頭髻、崇峻紀ヨ、頂髮をよめり、是を略髻と云、又、按ヨ箭ハ弦の誤りあるべし、神功紀ヨ、儲弦藏于髮中、とあるを見よ○王化ハ御思向なり○身體、神代紀ヨ身中をよゝ、

今朕察汝、爲人也、身體長大、容姿彼處ヨ注せり○雷電、天武紀

端正、力能扛鼎、猛如雷電、所向無

ヨ見ゑたるもおなじ、和名抄ヨ、電、伊奈比加利、一云伊奈豆流比、和訓栞ヨ稲交の義なり、雷雨をえて、稲の胎むより云、

前、所攻必勝、即知之形、則我子、實る詞なりと云、又○不敏、仁德紀、推古紀ヨ不賢をよめり、無長の義なるべし○德を仁愛ヨ渉りとる語なり、後世ウツクシと云ど、丹青の色ヨのゝ、思ひ寄せゝる○臣順ハ、参順なり、順原本類ヨ作まり、集解ヨ壷井本ヨ據て改めゝるヨ從ふ○浹辰ハ、記の序ヨ見ゑたり、

則神人、是寔天、愍朕不敏、且國不平、令經綸天業、不絶宗廟乎、亦是天下則汝、天下也、是位則汝、位也、願深謀遠慮、探姦伺變、示之以威、懷之以德、不煩兵甲、自令臣順、即於是日本武尊、乃受斧鉞、以再拜

成公八年、左傳ニ、浹辰之間而、楚克其三都、とあるを、杜預ガ十二日也と注し、後漢書、袁紹傳ニ、曽テ不ニ浹辰、罪人斯ニ殄、注ニ浹、匝也とゐり、文選勸進表に、曠之浹辰、則萬機以亂ル云々呂延濟ガ、浹、及ニ辰時也、自ニ甲及ニ癸為ニ一時、国語廿一ニ、浹日而令ニ大夫朝ニ之、注ニ從ニ甲至ニ甲為浹、浹、匝也、後漢書段熲傳ニ、曽テ未ニ浹日ニ云々、注ニ浹、匝也、謂ニ匝十二辰とゐり、是ら併せ見るに、浹日ハ從ニ甲至ニ癸間の、十日を云ヒ、浹辰ハ從ニ子至ニ亥間の、十二日を云り○吉備武彦、姓氏録下道朝臣、條ニ、吉備朝臣同祖、稚武彦命之男、吉備武彦命之後也、備中風土記ニ、賀夜郡伊勢御神社、東ニ有ニ河名宮瀬川、西、吉備建日子命之宮、造ニ此三世王、宮之故ニ仍名ニ宮瀬、三代實録三十六ニ、左京、人、左大史正六位上、印南野臣、宗雄、男三人女一人、妹一人ニ賜ニ笠、朝臣、其先、出自ニ吉備武彦命也、宗雄自言、吉備武彦、命第二男、御友別、命十一世孫人上、天平神護元年、取ニ居地之名、賜ニ印南野臣、姓、第三男鴨別、命、是笠、朝臣之祖也、兄弟之後、冝、同姓也、記ニ吉備臣等之祖、名、御鉏友耳建日子ニ作也○大伴武日、連ハ、垂仁紀ニ注せり○七掬脛ハ、脛の長サ七握ゐりとなり、孝徳紀ニ、八掬脛てゝ人も見ゆ○膳夫、和名抄ニ、大膳職を於保加之波天乃豆加佐、内膳司を、宇知乃加之波天乃官、主膳監を美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐と注せり、上代ハ廣き木葉ニ、物を盛ゆゝゆゑ、食敷葉と云ゝを、共ニ寄りゝて賄ふ人を、膳人とも云ゝり、其事神事と朝家の儀式とニ、かつゞ存り、名ハ其儘を傳たり○癸丑二日○戊午七日○枉道、万葉七ニ、從何處將行、與奇道者無荷、源氏若菜ニ、よぎ、れたゝはゝゝるよゝ、只

奏之曰、嘗西征之年、賴皇靈之威、提三尺劍、擊熊襲國、未經浹辰、賊首伏罪、今亦賴神祇之靈、借天皇之威、往臨其境、示以德教、猶有不服、即舉兵擊、仍重再拜之、天皇則命吉備武彦、與大伴武日連、令從日本武尊、亦以七掬脛、為膳夫

冬十月、壬子朔癸丑、日本武尊、發路之、戊午、枉道拜伊勢神宮、仍辭于倭姫命曰、今被天皇之命而、東征將誅諸叛者、故辭之、於是倭姫

今なむ人中云々、今常語ふも云、又、扨よぎるとハ、求めて寄り來るを云〇鋒ハ、罷申なり、源氏朝臣ふ、けすがふ、はらうまを〳〵、むと聞ゑ給云々、罷とハ向ふ方へ行くを云て、俗ふ暇申と云〇是歳、通證ふ歳當作月と云、又〇駿河ハ国造本紀ふ、珠流河ふ作り、惣国風土記ふ、

命、取草薙劔、授日本武尊曰、愼之莫怠也、是歳日本武尊、初至駿河其處賊陽從之欺曰、是野也麋鹿甚多、氣如朝霧、足如茂林、臨而應狩、日本武尊、信其言、入野中而覓獸、賊有殺王之情、王謂日本武尊也放火燒其野、王知被欺、則以燧出火之、向燒而得免一云、王所佩劔自抽之薙草、因是得免、故號其劔曰草薙也、叢雲、此云茂羅玖毛、王曰

薦河ふ作り、和名抄ふ駿河郡、駿河郷なり、かゝ〻ビバ郷名より廣ゐ又〳〵なり扨国名ふ駿河、播磨、郡名ふ平群、敦賀等の、駿群をスルグりとよむも、古韻ふて、其ゐ音韻啓蒙ふ云き〇麋鹿、字書ふ麋似水牛〇氣如朝霧、万葉十五ふ、君之由久、海邊乃夜杼爾、奇里多多、婆、安我多知奈氣久、伊伎等之理麻勢〇茂林、和名抄ふ、蔓、木細枝也、和名之毛止、新撰字鏡ふ、楮又柴をよめり、即繁木なり、林をハラとよゑるハ、神代紀ふ竹林、仁德紀、天武紀等ふ、松林ふどあゑ〇信其言、仲哀紀ふ如此言而、遂不信、安康紀ふ、信根、使主之讒言云々、物語書に、うけゐくと云も、信引なり〇以燧出火の、燧ハ和名抄ふ、比字知と注せり、是より先拜伊勢神宮、とゐる時のゐを、記ふ倭比賣命、賜草那藝劔、亦賜御嚢而、詔若有急事解茲嚢口、とありて、解開其所給嚢口、而見者、火打有其裏、とあるを、對、見るべし、按ふ上代火を採出すを、爰火ウチとあるを、石と金を打合、茵麻莖ふどの炭ふ、打附るゐや〇向火、源氏真木柱に、我もむりひつくりてあるべきを云々、扨向火とハ、彼方より燃來るを、此方より火を附て、向むしむるを云〇叢雲、神代紀八俣蛇の條ふ、見ゑ〳〵り〇自抽、此御劔の靈しく奇しく、おもゐるうを、天智七年、賊僧道行ダ所為、又天武天皇、朱鳥元年、御劔の御崇りふど併見て

殆被欺、則悉焚其賊衆而滅之、故號其處曰燒津

此ハ脱出ゆゑ〳〵ゆの、虚偽ゆゑ〳〵ざるを、了解をべし〳〵○焼津、和名抄駿河国、郡名益頭を、末志豆と注せるなど、其ハ焼を忌〳〵て、改め〳〵なり、式ハ同郡焼津神社見江たり○相摸、和名抄ハ佐加三と注し今も然云、など、記ハ佐賀牟能、袁怒邇と、相摸小野なり○上総和名抄ハ、上総、加三豆不佐、下総、之毛豆不佐、古語拾遺ハ、好麻所生故謂之総国○暴風、神代紀ハ注せ

亦進相摸、欲往上総、望海高言曰、是小海耳、可立跳渡、乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩而不可渡、時有従王之妾、曰弟橘媛、穂積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌王船欲没、是必海神心也、願以妾之身、贖王之命而入海言訖、乃披瀾入之、暴風即止、船得著岸、故

ア、○妾和名抄ハ、妾、非正嫡乎、無奈女と注し、宇鏡集、色葉字類抄、類聚名義抄等み、ヲウナメと、よめるハ、誤なり○弟橘媛の弟も、橘も愛る意なり○穂積氏ハ、開化紀ハ注せり、忍山もオシヤマとよむべし、継體紀ハ穂積臣、押山〳〵ふ人あるど、此年より四百三年後なれバ、別人なり○馳水、此地も相摸国三浦郡ハて、上総国天羽郡冨津ハ向ひ、此間僅一里ハも、足らざるバ、潮の出入甚急なり、妾ハ走水の観音と云ふもの、往來の船を守ると云て、通船を見る毎ハ、來て米を乞ふ、是ハ弟橘媛の霊を祭り、それを観音ハ呼易たるものなり

時人號其海、曰馳水也

○陸奥ハ、和名抄ハ、三知乃於久と注せるど、暮でミチノクと云、ハ、道とも国を云て、越前越後肥前肥後等を、和名抄ハ、

爰日本武尊、則従上総轉、入陸奥、國、時大鏡懸於王船、従海路廻於葦浦、横渡玉浦、至蝦夷境、蝦夷賊首、嶋津神、國津神等、屯於竹水門

古之乃三知乃久知、比乃美知乃之利ふと、注せる如く、国之口国之後なり、記の中巻ま、東方十二道とはるも、十二国ま

而欲距、然遥視王船、豫怖其威勢而、心裏知之不可勝、悉捨弓矢、望拜之曰、仰視君容、秀於人倫、若神之乎、欲知姓名、王対之曰、吾是現

ま八、陸奥八、国の奥なりと知るべし○大鏡八、御船の標ま

人神之子也、於是蝦夷等、悉慄則褰裳披浪、自扶王船而著岸、仍面縛服罪、故免其罪、因以俘其首帥

て○葦浦八、下総国海上郡の地名あるべし

而令従身也、蝦夷既平

然八常陸風土記、香嶋郡條ま、郡南童子女松原云々、号海上安是之嬢女とはる安是八、地名にて、葦ま おなじうるべし○玉浦八、常陸国行方郡の地名ま て、当麻の畧なるむ

ら、同国風土記ま、自郡東北十五里、当麻郷、古老曰倭武天皇巡行、過于此郷云々、章所経之道狭地深、浅取悪路之義、謂之当麻、和名抄行方郡郷名、当鹿とある、鹿八麻の誤りなり此地下総国海上郡より、直北ま当り、間ま湖水を隔つる由ま、横渡とハ云、り○蝦夷境ハ陸奥国白川郡以東を云、然ハ此時より五百五十年許を経て、齊明天皇の御世ま なり、蝦夷を三種として、尤遠を都加留、蝦夷と記せて、今松前の奥なる、蝦夷ま のみ耳馴て、猥ま古を疑ふすべくふむ○嶋津神国津神八、土人其暴威を懼きて号しなり、三代実録廿五ま、授常陸国正六位上国都神、従五位下とはるハ別なり混べるるず○竹水門、常陸風土記、多珂郡條ま、風俗説曰、薦枕多珂之国とはり、竹の轉なるべし、此地ハ彼国まて東北ま当り、北ハ陸奥ま接き、東ハ海を帯たきバ、水門と云ま縁なり、志うるま注者ら葦浦を下総国猨嶋郡、葦津とし、玉浦を同国西瑳郡珠浦とし、竹水門を、常陸国新治郡竹島とし、或ハ陸奥国名取郡、多加神社の地、ちどま説ふせるハ、惣て地理ま叶ハぎれバ用らべ○現人神、和名抄ま現人神、和名安良比止加美と注し、雄略紀ま現人之神、先稱王、諱續後紀十九に、毎皇ま 現人神止成給、万葉六ま住吉乃荒人神、舩舳爾、牛吐賜をべて神ふして、人形ま顕ま給ふと云、意なり、孝徳紀ま明神とはるもれふと○褰裳、按ま上代ハ男女とも、裳を著るる是ま て ちるし、猶云、で記ま、伊邪那岐大神、於投棄御裳云々、熱田縁起ま、倭武尊褰裳跋渉懸度ふど見るべし、以上男子の裳を著る例なり

○日高見国ハ上ニ注セリ、但是モ陸奥ナル日高見ヲ云、原本日ヲ曰ニ誤レリ○常陸、同国風土記ニ、停乗輿暫水洗手、御衣之袖垂泉而沾依漬袖之義、以為此国之名、国俗諺云、筑波岳黒雲掛衣袖漬国云々、是ヲヒタチト云、常陸ト書クハヒタミチノ略ナリ○甲斐

自日高見國、還之西南、歴常陸至甲斐國、居于酒折宮、時舉燭而進食、是夜以歌之問侍者曰、珥比麼利、菟玖波塢須擬氐、異玖用加禰菟流、諸侍者不能答言、時有秉燭者、續王歌之末、而歌曰、伽餓奈倍氐、用珥波虚能用、比珥波苫塢伽塢、即美秉燭人之聰而、敦賞則居是宮、以靫部、賜大伴連之遠祖

国、此国ヲ、山々群立テルヲ名ク峡国ト云、或ハ駒ヲ飼フヲ名、飼国ヲ、ドノ云ヘ、峡中紀行ニ、發府城取道板墻、左有酒折宮、祠二云、菅神與八幡也、亦謂之ヲ和歌宮云々、桂林漫録ニ、祭神日本武尊ニテ、燧袋ヲ神体トスト記セリ、和歌宮トハ爰ノ御歌ニヨリテ称ナルベシ○舉燭、按ニ此御世未ダ油燭ヲ用ヒザルニ脂松ヲ燭シ、顕宗紀ニ、命秉燭者トアルモ同ジ○珥比麼利ハ、常陸国ノ郡名ニテ、和名抄ニ新治、爾比波里ト注セリ、同国風土記ニ、美麻貴天皇駅宇之世云々、穿新井、其水浄流、仍以治井因、著郡號○菟玖波塢須擬氐ハ、過筑波而ニ、常陸国ノ郡名ナリ、同国風土記ニ、筑波之縣、古、謂紀国、美萬貴天皇之世、遣采女臣、友屬、筑波命、於紀国之国造、時筑波命曰、欲令身名者著国、而後世流傳、即改本號更称筑波者、風俗説曰、握飯筑波之国、按ニ上代ハ清音ニ云シヲ後ハ濁音ニツクバと呼ヒ来レリ、扨陸奥ヨリ還リ上ルニ新治筑波等ヲ過キ行ケリ○異玖用加禰菟流ハ、幾夜カ宿ツルナリ○伽餓奈倍氐、記傳ニ日々並テナリと云ヒ、然ラバ一時の日トナリ、日の月トナリテ、運ひもくをカともケとも云ヘバナリ○用珥波虚能用ハ、夜者九夜ナリ○比珥波苫塢伽塢ハ、日者十日ニテ、終の塢ハ歎息の辞ナリ○靫部ヲ靫負部ニテ、隨身ヲ賜ヘリ

○信濃、齊明紀ニハ、科野ト書ケル、此国の名義を、諸国名義考ニ、種々云キど、用ベキ説ナし、按ニ此国ハ科テ〻ノ木、多ク生立テ〻野ト云フより国名とハなるるや、郡郷ニ、更科倉科穂科埴科蓼科等ありも、其故ニや扨此科、木の皮以て、織出せる布を、信濃布と云フ、内匠式に、以信濃布張東隅蓋代、江次第新任大臣大饗條ニ、禄賜ふとて、史生信濃布三段、官掌召使二段云々、本朝文粹、高鳳判ニ貴賤之同交歌ニ尋其襪於足下、旦、信濃布穿云々、日本紀、暦永延二年七月、條ニ、布施信乃布三段、錢貨不用ニ、引出るニ追ひ〻む、

於是日本武尊曰、蝦夷、凶首、咸伏其辜、唯信濃、國、越、國、頗未レ従レ化、則自甲斐、北転レ歴武蔵、上野、西逮于碓日坂、時日本武尊、毎有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺而、東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、此云故因号山東諸國、曰吾嬬國也

如此ちげくニ云、馴きて、其布を信濃とのくも云フ、西宮記祭使條ニ、番長信濃四端、府掌三端とあり、是ハ結城博多八丈等の例ニて、其地名をもて、其産物を呼るなり、是ハ如此布とあるべき木の、多うの故ニ、おのづ〻国名ニ負ヒと云フ意もて、くちく引出つ、此国名古、む、シナヌあヲ〜を、人九集、和名抄等ニ、既シナノと轉ドよりり○武蔵名義詳ナ〻ず、記ニ年邪志、万葉ニ年射志と作り、是を武蔵の二字に書ケれど、藏ニザシの韵ありれむ、武藏志ありを〜を、略けるるや○雄日ハ、上野国の郡名ニて、和名抄ニ碓氷ニ作ア、宇須比と注せり、万葉せる、比奈久母理、宇須比乃佐可乎、古延志太爾とあるハ、此碓日坂なり○吾嬬者耶記ニ阿豆麻波夜ニ作キり、上代吾をアとのミ云フも万葉十二ニ吾妹兒哉、安乎忘為、莫、同十四ニ伊毛我名欲妣氏、吾乎祢之奈久奈ふど、見るべし、者耶ハ歎息の辞ニて、神代紀ニ阿奈陀磨波夜、崇神紀ニ泝磨紀異利寂胡播挪、ふど、せべておなど記ニ此件の古事を、足柄坂ニ傳〻ども、碓日ニ隣りて、吾妻郡ありきバ、此紀の傳へぞ正しうる歟き

○令鑒察、二十五年、紀ニ見ヱ〻ニおあど

於是分道、遣吉備、武彦、於越、國、令鑒察其地形嶮易及人民、順不、則

○倚杖ハ、杖ツ

キテの延語○日本武尊進入信濃、是國也山高
磴紆、カケハシ
谷幽、翠嶺万重、人倚杖而難外、巖
ト、吉野の意を
思ふ、危き岸
ほど、ゑ、架たる
橋を云、又と聞
嶮磴紆長峯數千、馬頓轡而不進、
せ、うゝる所を
俗ゑ、ガケとも、然日本武尊、披烟凌霧、遥徑大山、
ガケ路とも云、
和名抄ゑ、磯道
を加介知と注
し、夫木集八ゑ、既逮于峯而飢之、食於山中、山神
令苦王、以化白鹿立於王前、王異
ちゝゞきの、雲
のすぎれゑ、中
絶て、つゞきも
之、以一箇蒜、彈白鹿、則中眼而殺
之
ゑ、色ぬ岑のか
けゝゝ、然ゑ和名抄ゑ、梯をよゝて、所以登高也とゝるゝど、是ハ同名ゐして別也
字書ゑ石橋、曰磴、と注せゝも亦別なり○頓轡、万葉二ゑ、石根左久見手、名積來

之、同三ゑ、山道尚矣、名積、叙吾來前二、是ら行きぶたき所を、強て行意なり、頓轡ハ
文選陸士衡が、詩ゑ見色て、呂延濟が駐馬也と注せり○大山ハ真山の意なり、
御嶺御路准て考るべし、猶顕宗紀ゑ、弥野磨我倶利底、とあるを對見るべし○
白鹿推古紀に、越国獻白鹿一頭、和名抄ゑ鹿杖、加勢都恵と注せるハ、カセキ杖
の畧なり、夫木集三十ゑ、山ふゝ、おゝゝゝゝゝゝせゑのけちゝきゑ、世ゑ遠ぼうる、
程ぞ考ゝゝ、此歌玉葉集、山家集等ゑも載せて、鹿を云、方丈記ゑ、岑のゝせき
の近くあれゝゝゝゑ、世に遠ざうる程ゑ考ると記せるも、右ゑ引るゝ歌の意ふ
ゑ、八雲御抄ゑ、かせきを、鹿の異名と記し、猶宇治拾遺七、拾玉集等ゑも見ゑと
り、桜ゑ木、俣をカセキと云、るより、遂ゑ鹿角の相似たるゝを名云、轉せるゝ、木俣
をカセキと云、る證ゑ、古今著聞集二十ゑ、ある日山を過るゑ、大猿ありゝれば、
木ゑあひのぼせて、ゝゝゝゝるゝほどゑ、かせきゑあてゝゝ、既木よりおちむと
考ゝゝが、何とやらむ、物を木の俣に、おくやゝゝゑゝるを見ゑバ、子猿なりゝを
云々、又機織の具ゑ同名なり、後を造易、ゝるゑ考ゑど、上代のハ木俣のや
うにやなりゝむ古語拾遺ゑ、以麻柄作挂杙之、とあるをも見るべし、然ゑバ
白鹿ハ字の儘ゑ、よむべゝ思へど、姑舊讀ゑ從ふ○一箇蒜、和名抄ゑ蒜葷菜也、
和名比流、應神紀ゑ怒珥比蘆苑弥珥比蘆苑涕珥、とあり、扨蒜ゑ數種ありて、大
蒜小蒜、澤蒜、獨子蒜、などあり大和本草ゑハ、大小蒜を惣ゝゝ名とし、本
草啓蒙ゑハ、小蒜を當ゝゝ、何をも臭氣高き菜を、御食ゑ加ふゝしにや

○信濃坂ハ、記傳ヨ美濃国恵奈郡より、信濃国伊那郡ヨ越る国堺の坂ヨりと云、又、此坂

爰王忽失道、不知所出、時白狗自來、有導王之狀、隨狗而行之、得出美濃、吉備武彦、自越出而遇之、先是度信濃坂者、多得神氣以瘼臥、高し○神氣ヲ、カミノケとよむべし、記の崇神、段ヨ、神氣不起、国安平云々、物語書ヨ物のけと云るも、是におなじ、此氣をケとよめるを、字音なりと思ふもそらごとハ非なり、音訓間合なりと知るべし○瘼臥、神武紀ヨ人物咸瘁云々、仮名ハ記の中巻ヨ、後忽為遠延とあり、義ハ顕宗紀ヨ困事於人とあり、然るヨ和名抄ヨ、日本紀私記云、瘼臥、宇江不世利とあるバ、然訓べく思へど、姑舊讀ヨ從ふ○嚼蒜、是ハ狐狸及諸の悪事を避る、神方ヨ、めるバ、旅行の人ヲ火打と共ヨ、蒜をバ懐中為べきなり

塗人及牛馬、自不中神氣也

○更還於尾張、日本武尊、更還於尾張、即娶尾張氏之女宮簀媛、而淹留踰月、於是聞近江、膽吹山有荒神、即解劔置於宮簀媛家而徒行之、至膽吹山、○宮簀媛、記ヨ美夜受比賣ヨ作まり、尾張風土記ヨ、昔日本武命、巡歴東国還時、娶尾張連遠祖宮酢媛、宿於其家、夜頃向厠、隨身劔掛於桑木遺之入

山神化大蛇當道、爰日本武尊、不知主神化蛇之、謂是大蛇必荒神、之使也、既得殺王神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神之興雲零水、峯霧谷曀、無復可行之路、乃

殿乃驚更往取之、有光如神云々、謂宮酢媛曰、此劔神氣、宜奉齋之為吾形影、因以立社、熱田郷云々、熱田縁起ふハ、首路到尾張国愛智郡、時稲種、公啓曰、當郡火上邑有桑梓之地、伏請大王税駕息之、倭武尊感其懇誠、踟躕之間、側見一佳麗嬢、問其姓字、知稲種、公之妹名、宮酢姫、即命稲種、公聘納佳嬢云々、記ふ尾張国造之祖、美夜受比賣とハ、国造本紀ふ尾張国造、志賀高穴穂朝、以天別天火明命、十世孫小止與命、定賜国造、○淹留、文選幽憤詩ふ事與願違遘、茲淹留、李善ゲ爾雅を引て、久也と注せり、○膽吹山、式ふ近江国坂田郡、伊夫伎神社、按ふ山神毒氣を吹キたるふ因きる地名なれバ、息吹なり、○解劔、熱田縁起ふ、宮酢媛命會新舊相議曰、我身衰耄昏曉難期、事須未瞑之前占社奉遷神劔、○徒行万葉十一ふ、歩吾來汝念不得、○主神ハ、神實ふて御靈と云むゲ如ー是ハ主〻〻神の意ふて書々〻、主神と混べ〻〻ず、○跨ハ股越ク、○棲遑、神武紀ふ見ヒ〻〻、○失意ハ愚氣ク、○居醒泉、記に居寤清水ふ作き〻、

棲遑不知其所跂涉、然凌霧強行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飲其水而醒之、故號其泉曰居醒泉也

此地詳ナ〻ず、近江国坂田郡ふ、醒井て〻ふ地ありて、其所ふ好き清水もありと云、きと、尾張ふ還り行ふ道ふ〻ねバ、如何、然ハ云、廻り幸坐しも、知るべ〻〻ず、○尾津、和名抄ふ伊勢国桑名郡、郷名尾津、○此劔猶存、ふきを思ふふも、上代人の質直ふまーを見ふ、道不拾遺て〻ふるを、他国ふ問べ〻〻ず、○鳥波利珥ハ、於尾張たり〻、○多陀珥霧伽幣流ハ直所向ク、万葉七ふ、勢能山爾直向妹之山、案に

日本武尊、於是始有痛身、然稍起之還於尾張、爰不入宮簀媛之家、便移伊勢、而到尾津、昔日本武尊向東之歲、停尾津濱而進食、是時解一劔置於松下、遂忘而去、今至於此、劔猶存、故歌曰、烏波利珥、多陀珥霧伽幣流、比苔菟麻菟、阿波例、比等菟麻菟、比苔珥阿利勢磨、

古歌ニ多陀珥云々ハ、俗ニ直ニと云ヲ如ー

○比苦苑麻苑

岐農岐勢摩之塢、多知波開摩之塢

た、一本松なり、記ニ一松の上ニ、遠都能佐岐那流とあり○阿波例ハ歎息の辭、記ニハ此語ふくして、阿勢袁となり、即吾兄をふて、松を指せり○比等苑麻苑、上ふれふ〻○比苦珥阿利勢磨ハ、在レ人者也○岐農岐勢摩之塢ハ、衣着まーをなり○多知波開摩之塢ハ、太刀佩まーをなり

○能褒野ハ、伊勢国鈴鹿郡ニ

逮于能褒野、而痛甚之、則以所俘なり○獻於神宮ヲ、伊勢大神宮ニ、蝦夷等、獻於神宮、因遣吉備武彦、宮ふなり○愷悌ハ、軍解なり、

奏之於天皇、曰、臣受命天朝、遠征然ニ後漢書賈逵傳ニ、性愷悌多智思、注ニ愷、樂也、悌ハ易也、呂

東夷、則被神恩、賴皇威而、叛者伏罪、荒神自調、是以卷甲戢戈、愷悌氏春秋十八ニ、詩曰愷悌君子民之父母、愷者大也、悌者長也、君子之德、長且大者、則為民父母、後漢書章帝紀にも、愷悌ノ君子、大雅、所歎、注ニ愷、樂悌、易也ふと併考ふるニ、是ハ愷樂ニハ〻〻ド〻、字書ニ軍勝之樂、曰愷、とあるまバなり、記序ニ、愷悌ハ歸ニ於華夏ニとあるまバ、已往年記の標注を著ー時、悌ハ樂の誤ニやと云ーらど、熟思ふニ爾雅ニ愷悌發也とあり、注ニ發行也、疏ニ發明而行也とあれバ、其意ふーて見るとふハ、猶厭の儘ふーて可ふ〻むら、かゝまバ記の序なるも、更ニ説を加るふ及むざらむ、其をいふニはゆき、訓ハ姑舊讀ニ從ひてむ○隙駟ハ、その〻間ニ駒の走過るを見る如く、日影の過易きを云、り、新古今集ニ、ゆたゝーき年や我身をとめくゝむ、むまゆく駒ニ、道をはゝせて、莊子ニ人生ニ天地之間、若白駒過ニ郤、史記留侯傳ニ、人生一世間、如ニ白駒過ニ隙、同李斯傳ニ、人生居ニ世間也、譬猶駟ニ六驥、過ニ決隙、禮、三年問ニ、若駟之過隙ふど、ふバく何くまニ見ニて、支那人の口癖ニ云、るるまり、爰隙駟と書

○日本紀標注卷之八

還之、冀曷日曷、時、復命天朝、然天命忽至隙駟難停、是以獨卧曠野、無誰語之、豈惜身亡、唯愁不面、既而崩于能褒野、時年三十

けるハ、其を畧にて、文選劉孝標書ニ、隙駒不留とあり、駒ハ字書ニ、四馬一乗也と注せり○曠野、和名抄ニ日本紀私記云、安良乃良とよめり、良ハ加ニとるニて古今ニ、里ハあれて、人もふりゆき、宿ふるきや、庭もまゲねも、秋の野らゝ、草村の、野ら風よりも、寒くなるらむ、猶野鼠野猫、野豆あゞ、併て見るべし○崩于能褒野の、崩ハ天子ニ称るニて、喪葬令ニ親王及三位以上輦薨とあり、然ニ日本武尊をバ、惣て天子ニ准、尊ミたゝむ、常陸風土記ニ、倭武天皇と称し、阿波風土記ニも、倭健天皇と記せり、故其薨を崩と称し、御墓を陵と記せり○年三十、是ハ二十七年、條に、時年十六とありて、征東の翌年を薨去として、數たるなり、然ニ下ニ是歳天皇踐祚四十三年焉とあるハ、征伐の間を去ゝしめたるなり、然見ざれバ、是歳云々ハ、徒たゝる文たれバ、三十二歳ニて崩ぜゝ

天皇聞之、寢不安席、食不甘味、晝夜喉咽、泣悲摽擗、因以大歎之曰、我子小碓王、昔熊襲叛之日、未及総角、久煩征伐、既而恒在左右、補

○摽擗、万葉五ニ、伏仰武祢宇知奈氣吉、詩、邶風ニ、寤擗有摽、

朕不及、然東夷騒動、勿使討者、忍愛以入賊境、一日之無不顧、是以朝夕進退、佇待還日、何禍兮何罪兮、不意之間、倏亡我子、自今以後、與誰人之經綸鴻業耶、即詔羣卿命百寮、仍葬於伊勢、國能褒野陵

○小碓王、原本小を少ニ、誤る○総角ハ、和名抄ニ結髪也、和名阿介萬岐、新撰字鏡ニ、髪角巾束髪阿介万支、是ハ男子十五六ニ至るバ、髪を左右ニ分結揚て、其状角の如く見ゆるゆゑ、揚巻とハ云、又、詩、衛風に、總角之宴、言笑晏々とあるを、結髪為飾也と注せり、文選懐舊賦ニ、余髫角而獲見呂向が童子髫也、と注せり○進退ハ、迷ふニてサて發語○佇待ハ、爪立待なり、詩邶風ニ、瞻望弗及佇立以泣、○不意之間、皇極紀ニ、出其不意、源氏若紫ニ、もくゝとあゝ、ものふゝきおまゝ所ニ云々、大和物語ニ、やくりもあゝく、かをいどまて、馬ニのせて云々、此語古書ニハ見ゑねど、意ハ聞ゑたり○倏

續紀三十六ニ、今日加有牟明日加有牟止、所念食都々、待比賜間尓、安加良米佐須加事々、於與豆礼加毛、年毛高久成多流、朕乎置豆云々、宇治拾遺ニ、榻をたて、梢を目もたゝずあかゝめもせずして、よもすがら、夫木集十五ニ、唐ニしよ、おそつむ岑の、村紅葉、見初るそ、ふもなりゝめもせず、猶多ゝきと洩しつ、如此書集めて、其意を捜試るニ一瞬の油断あるを、アカラメと云て、サスとハ為の意なり、其油断ゝまを、アカラメセズと云、類聚名義抄ニハ、賣目をアカラメと注せり、然ルニ此倏字を書くハ、急速の意をきゝしめと、神武紀ニ、儵忽之間とあり、同義ニて、儵ハ倏の本字なり

○白鳥通證ニ

今熱田、莊宮地村、民俗不食白鷺と記せり、うとゝバ白鳥ハ鷺なりゝむ、又云讃岐国高松、有白鳥明神相傳、祭武尊、土俗不食鶴と記せ

時日本武尊、化白鳥、從陵出之指於倭國而飛之、群臣等因以開其棺視之、明衣空留而屍骨無之、於是遣使者追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處造陵焉、白鳥更飛、至河内留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵、曰白鳥陵、然遂定ゝたゝ○棺槨、類聚国史ニ、槨を槨ニ作きり○明衣ハ、御衣なり、淮南子兵畧訓ニ、爪髮ニ設明衣、鴻烈ニ明衣、喪衣也、在於闇冥故言明、唐書礼樂志凶礼、條ニ、衣以明衣裳、以方中覆面○琴彈原、允恭紀ニ、琴引坂とあり、同地なり、大和志に、白鳥陵在葛上郡冨田村、今稱天王山○舊市邑ハ、河内国郡名にて、和名抄ニ古市、不留知と注せきど、土人ハフルイチと呼、あゝへて、志ニ、白鳥陵在古市村、陵上有祠稱伊岐宮、年治云同郡輕墓村ニ荒陵あり、地をめぐゝ其廣大なる、帝陵ニもをさく劣らぎ是を輕皇子の墓と云、きど、彼皇子も罪せゝきさる人なれど、うゝる墓を築くべき理なゝ、或人輕ハ空ニて、是なん白鳥の陵なゝむと云、て○衣冠ハ御衣津物なり○武部、式ニ近江國栗太郡、建部神社、和名抄郡郷部ニ、建部又健部等見きゝり、武部を置ハ

飛、至河内留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵、曰白鳥陵、然遂定名

高翔上天、徒葬衣冠、因欲録功名

即定武部也、是歳天皇踐祚四十三年焉

まひし地なるべし、然るに伊勢国安濃郡郷名に、建部ありて和名抄に、太介無倍の訓注あり、是ハタケリベの轉々、たゞ土人の呼誤まりゆゝを記せるゝ定り なるべし、姓氏録に建部公、犬上朝臣同祖、日本武尊之後也とあるハ、次に稲依別王ハ、是犬上君武部君凡二族之始祖也、とあるを云へり○四十三年、此月上に論あるつ○戊子七日、案に白馬

五十一年、春正月、壬午朔戊子、招群臣而宴歎曰、矣、時皇子稚足彦尊、武内宿禰、不参赴于宴庭、天皇召之問其故、因以奏之曰、其宴樂之日、群卿百寮、必情在戲遊、不存國家、若有狂生而伺墻閣之隙乎、故侍門下備非常、時天皇謂之曰、

事物紀原に、凡禁門黄闥、故號黄門、其官給事於黄闥内、故云唐、天寶元年、改曰門下、云々○灼然、神武紀に理實灼然と、いふる處に注して

灼然、以耶知、云舉則異寵焉

○壬子四日○棟梁之臣ハ、宗大臣ふて、棟、字に詣たゝ訓に

秋八月、己酉朔壬子、立稚足彦尊為皇太子、是日命武内宿禰、為棟梁之臣、初日本武尊、所佩草薙、横たゝず、五代史趙鳳傳に大臣、国之棟梁柱石也、後漢書馮衍傳に、大將軍為之梁棟、とあり

刀、是今在尾張國、年魚市郡熱田社也、於是所獻神宮、蝦夷等晝夜同事なり○年魚市ハ、尾張国の郡名にて、和名抄に愛智、阿

喧譁、出入無禮、時倭姫命、曰、是蝦夷等不可近就於神宮、則進上於

伊知、と注せれど、神代紀ニ、吾湯市ニ作るを見るべし、年魚ハ香魚ニて、一年立の魚ニ

朝庭、仍令安置御諸山傍、未経幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里而脅人民

るゆゑ然書き、和名抄ニハ、鮎字を當て、安由と注せり○喧譁、舒明紀ニ、諠譁を奈利止與久の旁訓ありナリて鳴ふて、トヨクも響ニおふ、崇神紀ニ、海外荒俗騒動、推古紀ニ、勿諠言ふど俄見るべし○無禮ハ、禮ふしと同語ニて、禮まし敬まし、恭しなどの如し、類聚名義抄ニ、礼代をウヤジロと注せり、常に礼代と云ふ○倭姫命、原本姫字を落せり○隣里、論語隣里鄉黨の注ニ、五家為隣、二十五家為里○邦畿之外ハ、外国なり、按ニ

天皇聞之詔群卿曰、其置神山傍近江以東、播磨以西、畿内ニ

之蝦夷、是本有獣心難住中國、故

對て、外国とハ云、て、其例ハ天

隨其情願、令班邦畿之外、是今播

武紀に、外国人、欲進仕者、臣連伴造之子、及国造子聽之、持統紀ニ、外国者稲人二十束、續紀十ニ、隨地寛狹、取中上田一分畿内一分、外国、隨闕収授、續後紀十八ニ、自外国官、遷任京官、貞觀十七年三月廿八日、三代格ニ畿内外国不受幣物、同附件三箇使日本記略、天長五年三月條ニ、京官外国、五位已上職居長官、ふど見るべし、如此くだくしく引出つるも、今世とのくしき學匠どちが、歌ニ文ニ、海外諸蛮を、外国と書々ふ、其失をまゝしめむと免ぞ、邦畿の字ハ詩、商頌ニ、見邑〻〻○播磨仁徳紀ニ、播磨、佐伯直、阿俄能胡、續紀四十ニ、播磨国揖保郡百姓、佐伯君麻呂、續後紀十六ニ、揖保郡人、散位正八位上、佐伯直宅守ふど見ゆ○讃岐、此国名を記傳ニ、濁音ニよゝるハ非なり、天智紀に、讃吉国山田郡、持統紀ニ、讃吉国御城郡、續紀四十ニ、讃岐国寒川郡人、正六位上凡直千継云々、賜紗授大押直之姓、ふど惣て清音ふるを見よ、此外猶例ありなど略、扨此国ニ佐伯の見ゆゝるハ、續後紀五ニ、讃岐国人散位佐伯直継、文德實録二ニ、讃岐国人従七位上、佐伯直正雄ふどなり○伊勢ハ、伊豫ニ作るべし、始倭姫命蝦夷を悪して退けゝひしふても伊勢ニ置づき理なく且次に引く姓氏録佐伯直を参考べし、然ニ伊豫国の地名人名等ニ、佐伯てゝ多なり、今按ニ常陸陸奥

磨、讃岐伊勢安藝、阿波凡五國、佐伯部之祖也

出羽等の俘囚を、史ゑ吉弥侯部と記し、即佐伯部と同種なるべ、伊豫国ゑてハ、吉弥侯と傳へ、〻〻、日本後紀廿二ゑ、賜伊豫国人勲六等、吉弥侯部、勝麻呂、吉弥侯部、佐奈布留二人、姓野原とあり○安藝、郡名に佐伯あり、日本後紀五ゑ、安藝国沼田郡、佐伯、直那加女と云、人見る〻〻八、仁徳天皇三十八年ゑ、摂津国より移し〻たる、佐伯部の後胤ゑめれど、素安藝国ゑ由あり〻ゑ故、類聚国史百九十、天長八年十一月、安藝国俘囚吉弥侯部、佐津古、叙外従八位下、俘囚吉弥侯部軍麻呂、叙外少初位下○阿波ハ、粟の美く熟る名、国名ゑ負ゝむ、類聚国史百九十、天長九年十二月、伊豫国俘囚吉弾侯部、於止利等男女五人、移配阿波国優情願也、とあり、其先ハ阿波人なり〻を推ず〻○佐伯部、和名抄安藝国郡名、佐伯、佐倍木と注せり、釋紀ゑ私記曰、毛人等旦夕叫呦、其聲嚴厲、故倭姫號為佐祁毗、今謂佐伯是也、とあり、佐伯の名義を傳へたるなり、姓氏録ゑ、佐伯直、景行天皇皇子、稲背入彦命之後也、男御諸別命、稚足彦天皇御代、中分針間国、給之、仍号針間別、男阿良都命、一名伊許自別、譽田天皇為定国堺、車駕巡幸到針間国、神埼郡瓦村、東崗上、于時青菜葉自崗邊川流下、天皇詔應川上有人、也、仍差伊許自別命、往問、即答曰、已等是日本武尊、平東夷時、所俘蝦夷之後也、遣於針間、阿藝、阿波讃岐、伊豫等国、仍居地為氏也、後改為佐伯、伊許自別命以状復奏、天皇詔曰、宜汝為君治之、即賜氏針間別、佐伯直、姓也云々、扨素より俘囚なり〻を、佐伯と云、むハ、論なきを、其佐伯等を掌る人ゑも、佐伯の姓を賜し〻名、夷種の外ゑ、皇別神別

相雜ゑ、常陸風土記ゑ、山賊等を山之佐伯、野之佐伯と記せり、彼も是も物云ふの、叫呼ふ、負たる名なるべ〻

○両道入姫皇女ハ、垂仁天皇の御女○稲依別王、字の如く、妃生稲依別王、次足仲彦天皇、次稲依別王、字の如く、〻〻、布忍入姫命、次稚武王、其兄、稲依

称、〻〻○布忍入姫命、記の上巻ゑ、青沼馬沼押比賣、とある沼押ゑおあ

布忍入姫命、次稚武王、其兄、稲依

ゞかるゞし、然らバ主忍の轉也○稚武王、名義字の如し○大上君、和名抄ゑ、近江国郡名、犬上、以奴加三

別王、是大上君、武部君、凡二族之始祖也、又妃吉備、武彦之女、吉備穴戸武媛、生武殻王、與十城別王、

大上君、武卵王、是讃岐、綾君之始祖也、弟十城別王、是伊豫、別君、之始

と注し、氏人ハ推古紀に、大上君御田鍬、齊明紀ニ、犬上君白麻呂ナド見ヘ、三代實録四十八ニ、近江國大上郡、大領從七位上、大上春吉と云、人も見ヘ天武十三年紀ニ、犬上君賜姓曰朝臣○武部君、姓氏録ニ、建部公、大上朝臣同祖、日本武尊之後也○吉備穴戸武媛、式ニ備中国下道郡、穴戸山、神社、武ハ父名を襲たり○武穀王、原本穀を鼓ニ作まゝ、誤なり、記ニ建貝兒王ニ作り、次ニ、武卵王ともいふきハ、穀鼓字形の相似たるより、譌なるべし、字書ニ穀、鳥卵と注し、色葉字類抄、和玉篇等に、カヒコの注あきハ、今改つ世ニ讃留王、記と云、る古書ありて、武穀王のるを記し、詔封讃岐国、造、改称武明王、實、綾公之祖也とあり中臣宮處氏本系帳ニ、多祁迦比古王命之御子、通美麻大主命之御子、那岐通麻大主命之御子也、とあり、史を補ふべし○十城別王、名義考ず、式ニ肥前国松浦郡、志志伎神社とあるハ、此王を祭まゝ、神名帳頭注ニ記せり○武卵王の卵ハ、穀を略書くるなり○讃岐綾君、和名抄ニ讃岐国郡名、阿野、綾と注せり、續紀四十ニ讃岐国阿野郡、正六位上綾公菅麻呂云々、賜朝臣之姓、天武十三年、紀ニ綾君賜姓曰朝臣○伊豫別君、和名抄ニ伊豫国郡名、和氣、和計と注せり○穂積氏、上ニ見たり○稚武彦王孝霊天皇の御子ニ同名あり、是ハ御兄

祖也、次妃穂積氏、忍山宿禰之女、弟播媛、生稚武彦王、

の名ニ彦を加へたるなり○丁未四日○播磨大郎姫薨、播磨風土記、賀古郡、條ニ、別嬢薨於此宮、即作墓於日巫而葬之、舉其尸度印南川之時、大飄自川下來、纏入其尸川中、求南不得、但得匣与裙、即以此二物葬於其墓、故号裙墓云々、南字ハ誤まゝ○己酉七日○八坂入媛命ハ、崇神天皇の御子、八坂入彦命の御女なり○乘輿、儀制令ニ、乘輿、服御所稱とあきど、此字ニつきて義を得ず○東海、ウヘツミチとよめるニ上ニ注せり、○

五十二年、夏五月、甲辰朔丁未、皇后播磨大郎姫薨、秋七月、癸卯朔己酉、立八坂入媛命、為皇后、

五十三年、秋八月、丁卯朔、天皇詔群卿曰、朕顧愛子、何日止乎、冀欲巡狩小碓王、所平之國、是月乘輿東海、冬十月、至上總

淡水門の淡ハ、安房国ヨリ、郡名安房ヨリ廣キなり、此国舊ヲ上総ヨリ惣なり、ーを元正天皇、養老二年五月、割上総国之、平群安房朝夷長狹四郡、置安房国とゝなりて聖武天皇、天平年中、舊の上総ヨリ并ーを、孝謙天皇天平寶字元年五月、安房国依舊分立と記せり、水門ハ安房郡、洲崎邊ヨリ○覺賀鳥和名抄ヨリ、鴟鴞和名美佐古、今案古語拾遺、三字云、加久加乃土利、見日本紀私記、公望案高橋氏文云、水佐古とゝなり、高橋氏文に、到于上総国安房、浮嶋宮、尒時磐鹿六獦命、從駕仕奉矣、天皇行幸於葛飾野、令御獦矣、大后八坂

國、從海路渡淡水門、是時聞覺賀鳥之聲、欲見其鳥形、尋而出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖、名磐鹿六鴈、以蒲爲手繩、白蛤爲膾而進之、故美六鴈臣之功而、賜膳大伴部、十二月從東國還之居伊勢也、是謂綺宮

嫄波、借宮尒御坐、磐鹿六獦命、此時大后、詔磐鹿六獦命、此浦聞異鳥之音、其鳴賀我久久欲見其形、即磐鹿六獦命、乘船到于鳥許、鳥驚飛於他浦、猶雖追行遂不得捕、於是磐鹿六獦命詛曰、汝鳥戀其音、欲見貌、飛遷他浦、不見其形、自今以後不得登陸、若大地下居、必死、以海中爲住處云々○白蛤、高橋氏文ヨリ、八尺白蛤、に作ル、新撰字鏡ヨリ、蟾蜍蚨蚨の三字をおのく宇牟支と注し、和名抄ヨリ海蛤一名魁蛤を、宇無木乃加比と注し、醫心方、本草和名等もおなじ、按ヨリ白蛤ハ石決明を云ふ、然云ふも、和名抄ヨリ瀋羊藿を宇無木奈と注し、此草葉畧石決明ヨリ似通ひたるバなり、且安房の海中より、殊ヨリ大きなるを産せるバ、上ヨリ八尺白蛤とあるゆへも、由あるをや、原本蛤を蛤ヨリ作ル、類聚国史ヨリ據て改む○膳臣、姓氏録膳大伴部、條ヨリ、傳、ふる古説、此件と事おなじ、天武十三年、紀ヨリ、膳臣賜姓曰朝臣○磐鹿六鴈ハ、紹運録ヨリ、大彦命子、六雁命、高橋氏祖とあり、大彦命ハ孝元天皇の皇子なり○蒲和名抄ヨリ、蒲、草名、似蘭、可以爲席也、和名加末とあり○膾、和名抄ヨリ、鱠、細切肉也、和名奈萬須○膳大伴部、姓氏録ヨリ、膳、大伴部、大彦命、孫、磐鹿六雁命之後也、景行天皇巡狩東国、至上総国、從海路渡淡水門、出海中、得白蛤、於是磐鹿六雁爲膾進之、故美六雁賜膳大伴部とゝなるハ、此件の傳、ふおなじ、此氏人書ヨリ見ゑず、但續後紀十八ヨリ、膳伴公家吉、三代實録卅九ヨリ、膳伴安麻呂とゝなるハ、同姓ゆ考べし、續紀卅九ヨリ、勅唯令以高橋安曇二氏任内膳司者爲奉膳云々、高橋氏文ヨリ六鴈命、七十二年、秋八月受病、同月薨云々○綺宮、所在詳ふ

らず、若し川俣ハ此綺の轉々式ヨ同国鈴鹿郡川俣神社あり、此地の事、倭姫世記を始メ考へ見ヨ

○己酉十九日

○纒向宮、上ヨ都於纒向、是謂日代宮、○壬辰五日○彦狹島王、の父、祖詳ならず、孝靈天皇の御子ヨも、彦狹島命見ヱれど其ヨハ分ラず

五十四年、秋九月、辛卯朔己酉、自伊勢還於倭、居纒向宮

五十五年、春二月、戊子朔壬辰、以彦狹嶋王、拜東山道、十五國都督、是豐城命之孫也、然到春日穴咋、む○豐城命ハ、豐城入彦命の略称ヨて、崇神天皇の御子ヨり○東山道、西宮記郡司讀奏ヨ、ヤマノミチとも、ヒムカシノヤマノミチとも、よえり、此ヨ十五国とあるも、上代も一郡許の地をも、其国と云ふ常ヨ也、を

邑、卧病而薨之、是時東國百姓、悲其王不至、竊盜王尸、葬於上野國

や○都督、唐書百官志、大都督府、都督一人從二品○春日穴咋邑、和名抄ヨ、美濃國池田郡春日郷ヲ分、是ヨるべし、然ど穴咋ヲ山地名ハ未考、む、姓ヨハ續紀三十九ヨ、穴咋、皆麻呂と云ふ人見ヨ

○御諸別王、姓氏録韓矢田部、造、下ヨ、豐城入彦命、三世孫、彌母呂別命とあ事、猶右京皇別、佐伯直、下考、合べし○出羽人安濃恒生曰同国出羽郡清河村々祖五所王子社と傳、來る山の麓ヨ崩御、宮と云、即王子

五十六年、秋八月、詔御諸別王曰、汝父彦狹嶋王、不得向任所而早薨、故汝專領東國、是以御諸別王、兼天皇命、且欲成父業、則行治之

○日本紀標注卷之八

○四十六

早得善政、時蝦夷騷動、即舉兵而擊焉、時蝦夷首帥、足振邊、大羽振邊、遠津闇男邊等、叩頭而來之、頓

の御墓地なり
とぞ慶長中最
上川の水を引
て田を漑らむ

首受罪、盡獻其地、因以免降者、而誅不服、是以東久之無事焉、由是
と其御墓を發き
て溝作らんと

其子孫、於今有東國

人夫數百人を使ひて其役を當るゝ際一五六十人忽石を擊きて瘡つくも
の死るもの半を過ぎ終を其多止らゝ、明治となりて恒生彼地を到り其神主
ゝ面一古書等數多取出さしめゝ、中を御諸王子とあるを見ゝりこゝまバ、
五所ハ御諸の字音より誤りたりと語まゝ、ハ甚奇なりと云べし○足振邊、式を
相摸国大住郡、阿夫利神社見也、邊ハ戸なり○大羽振邊の、大ハ字のおゝ、和
名抄を、上野国新田郡郷名、祝人波布利、式を信濃国埴科郡祝神社○遠津闇男
邊詳なゝず○頓首、周礼春官大祝を、九拜一曰稽首、二曰頓首、鄭玄が頭拜即地
也と注し、隋書奬子蓋、傳を、頓首流血○子孫於今有東国、按を姓氏録を池田朝
臣桑原、臣、川合、公佐味朝臣、大野朝臣、田邊、史、茨木、造、吉弥侯部等、皆此王の後を
て、池田ハ和名抄を、上野国邑樂郡、同国那波郡等の郷名、又美濃国郡名、同国可
兒郡、尾張国春部郡、下総国千葉郡等をも、池田郷あり、桑原ハ信濃国、諏訪郡、近
江国高嶋郡等の、郷名を見邑たり、川合ハ甲斐国八代郡、同国巨麻郡等の郷名

を見邑、佐味ハ上野国緑野郡同国那波郡等の郷名を見邑、田邊ハ下野国足利
郡、下総国匝瑳郡等の、郷名を田部となり是ゝ、茨木ハ常陸国郡名を見邑、吉弥
侯部ハ、東国を多くる姓をゝ、續紀以下數るに堪へず此外住吉、朝臣、池原朝臣、垂
水、史、商長、首、大綱臣、宇自可臣車持公等の諸姓、ゝを此王の後ゝて、其子孫東国
を散在せるもの、多うめきどうるとそれ
を略○有東国の有ハ、在の意を見るべし

○坂手池ハ、大
和国城下郡を

五十七年、秋九月、造坂手池、即竹

在り、志を今涸
為田畝、堤今十

蒔其堤上、冬十月、令諸國興田部、

市郡、東、竹田村
即此と記せり

屯倉

○田部、和名抄を田部てゝ、郷名多くる中、伊勢国度會郡郷名をハ、多乃倍と注せ
し、長門国豊浦郡郷名をハ、多倍と注せきバ、姑、夕べとよゝつ、欽明紀を詔曰、量
置田部、其來尚矣、年甫十餘、脱籍免課者衆、宜遣膳津、換定白猪、田部一籍、安閑紀
を以小墾田、屯倉、與毎国田部、給貺紗手媛云々とある如く、田部と屯倉ハ別物
にて田部とハ公田を作らしむる民
戸をゝ、屯倉ハ垂仁紀を注しつ

○辛亥十一日
○志賀、近江国の郡名○高穴穂宮の、高ハ尊称、朝野群載十一ニ、近江国穴太驛見ユ今穴太村あり、三代實録七ニ、近江国坂田郡穴太氏と見ユ、元志賀郡より移住めるふるべ〜

五十八年、春二月、辛丑朔辛亥、幸近江國、居志賀三歲、是謂高穴穂宮

○辛卯七日○一百六歲、紀ニ、垂仁天皇卅七年、紀ニ、立大足彦尊為皇太子、其年より數、百廿三年を経たり記ニ壹佰參拾漆歲とあるを是とすべ〜

六十年、冬十一月、乙酉朔辛卯、天皇崩於高穴穂宮、時年一百六歲

○稚足彦天皇ハ、御父大足彦と称ニ對、たり此天皇を、後ニ成務と諡奉り○八坂入彦皇子ハ、崇神天皇の御子

成務天皇

稚足彦天皇

稚足彦、天皇、大足彦忍代別天皇第四子也、母后曰八坂入姫命、八坂入彦、皇子之女也、大足彦天皇、四十六年、立為太子、年二十四、六十年冬十一月、大足彦、天皇崩元年春正月、甲申朔戊子、皇太子即位、是年也太歲辛未

○戊子五日

○壬午十日○山邊道上陵ハ、諸陵式に、在大和国城上郡、兆

二年冬十一月、癸酉朔壬午、葬大足彦、天皇、於倭國之山邊、道、上、陵、

域東西二町、南北二町、陵戸一畑、志ヨ在柳本村、東、稱御陵云々○己卯七日○大臣、和名抄ヨ、於保伊萬宇智岐美ト注セリ

尊皇后曰皇太后、三年春正月、癸酉朔己卯、以武内宿禰爲大臣也、初天皇與武内宿禰同日生之、故有異寵焉

禰、大臣、和名抄ヨ、於保伊萬宇智岐美ト注セリ○同日生、按ニ天皇ハ百七歲ヨテ崩ジ給ヘバ、景行天皇十四年ヨリ生レ給フヲ、然ルヨ景行二十五年、紀ヨ、遣武内宿禰、令察北陸及東方諸国之地形ト云フ、若、天皇ト同年トセバ此時宿禰ハ僅十二歲ナリ、且ツ同天皇三年、紀ヨ、既宿禰の出生をも記せれど、天皇より前ヨ生きしヲ考フベシ、通證ヨ同日者謂支干適同也ト云フハ如何、此時支干のいかゝ理あきなや、是ハ同年生トヨミタルニテ、同日生ナラバ、論ずるヨ及ばず○奮籙、文選東京賦ヨ、奮籙受圖、順天行誅、呂延濟ヨ奮、當也、

四年春二月、丙寅朔詔之曰、我先、皇大足彦、天皇、聰明神武、奮籙受籙、五勝之籙、圖、河圖、云々、以下此賦文を少易、たり○覆燾ハ、

圖、治天順人、撥賊反正、德侔覆燾、臣、稟氣懷靈、何非得處、今朕嗣踐、寶祚、夙夜兢惕、然黎元蠢爾不悛、野心、是國郡無君長、縣邑無首渠、者焉、自今以後、國郡立長、縣邑置首、即取當國之幹了者、任其國郡之首長、是爲中區之蕃屏也

道協造化、是以普天率土、莫不王、

者動而無知之貌昭公廿四年、左傳ニ、王室蠢々焉を、動揺貌と注せり○首渠ハ、大人ふて次ニ見ヘ、稲置を云、○幹了、推古紀ニ進止軌制、孝德紀ニ民明直心、真字伊勢物語ニ、丈毛不幹況、哉歌者獲不讀計礼者與儀抄五ニ、をちくしと云、心なり、躬恒ガ假名の序ニも、なるゝものをさくしられば、をらく住なしたりとかなり云々、考課令義解ニ、幹了者幹、強也了、慧也と、記せり○中區ハ、内津国ニて、畿内を云、丈題蜀都賦ニ、兼市中區劉良ガ區、區城也と注せ玉○蕃屏、漢書地理志ニ、諸侯蕃屏四方、文選上責躬應詔詩表ニ、作蕃作屏、先軌是隣云々、書、蔡仲之命ニ、睦乃四隣以蕃王室、おど併見るニ、マガキとよむべし、傳公二十四年、左傳ニ、封建親戚以蕃屏国、疏ニ分地以建諸侯、使下與京師作蕃籬屏扞上也

○造長ハ、国造郡司を云、きど、

五年秋九月、令諸國以、國郡立造、稲置ニ對、られバ、ミヤツコと訓づ、即御奴長、縣邑置稲置、並賜楯矛以爲表、ふて、上代ハ王則隔山河而分國縣、隨阡陌以定公以下天皇ニ對、奉りてハ、奴と邑里、因以東西爲日縱、南北爲日

称せり○稲置万葉十六に、稲すと書かれバ、イナキと訓づ

横、山陽曰影面、山陰曰背面、是以百姓安居、天下無事焉

、名義ハ詳ならず、按ニ稲置ハ、縣主と共ニ郡政を知るとゝもに、大少領と職名を定めざるゝ時ハ、大領ハ縣主にして、少領ハ稲置ニ當り、何ども中昔ニ、郡司なり、此称景行二十七年、紀ニ見ヘて、記ニハ定賜大国小国之国造、亦定賜國々之堺、及大縣小縣之縣主、云々○賜楯矛、是ハ殊ニ愛たる事實を傳、なるを、世の識者ハ心着ざるゝ、此紀の文法ニ書バ、賜印綬とあそばるゝべきニ、撰者も思ひ洩シ、ニや○阡陌、和名抄ニ南北曰阡、日本紀私記云、多知之乃美知、東西曰陌、日本紀私記云、與古之乃美知、史記秦紀ニ、為田、開阡陌、注ニ以東西為阡南北為佰○日縱、万葉一ニ、日本乃青香具山者、日経乃大御門爾、春山跡之美佐備立有、故火乃此美豆山者、日緯能大御門爾云々、同十八ニ、多多佐爾毛、可爾母與巳佐母云々○影面ハ、影津面の切りなり、万葉一ニ、名細吉野乃山者、影友乃大御門從○背面ハ背津面の切り也

四十八年、春三月、庚辰朔、立甥足

○甥和名抄ニ、兄弟之子爲甥、

仲彦、爲皇太子

和名乎比と注せり、足仲彦尊八、天皇の御兄日本武尊の御子なり○巳卯十一日○一百七歳按ずるに前紀に、大足彦天皇四十六年、立為太子、年二十四とあるを以て數ぎれば、九十八歳なり、記に玖拾伍歳とあり

六十年夏六月、己巳朔己卯、天皇崩、時年一百七歳

内閣文庫

日本紀標注卷之八終

昭和四年七月六日納本

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan